佐久考古通信

No 1
750925
佐久考古学会

—・(昭和50年度第1回佐久考古学会総会(予告))・—

下記のとおり昭和50年度佐久考古学会総会を開きますので、全会員の出席をお願いします。

記

1、日　時　　10月5日(日)　午後1時～
2、会　場　　佐久市岩村田浅間会館　大会議室
3、日　程
　(1)開会のことば
　(2)会長あいさつ
　(3)事務局あいさつ
　(4)議長選出
　(5)経過報告
　(6)議　事
　　第1号　　委員の件
　　第2号　　昭和50年度事業計画(案)の件
　　第3号　　会費変更の件
　　第4号　　昭和50年度予算承認の件
　(7)閉会のことば
　(8)記念講演
　　「佐久地域分布調査の成果について」
　　県文化財指導主事
　　丸山　敬一郎先生

—*懇親会開催について*—
総会終了後，旧交をあたためようと，会費千円にて，その場で懇親会を開くよう計画しました．多数御参加ください。

――佐久考古通信発刊にあたって――

佐久考古学会会長 由井茂也

此の度、従来の佐久考古の外に、佐久考古通信を発刊することになりました。なるべく回数を多くということで計画を進めています。

佐久考古通信は、何よりも会員の緊密な連絡，連帯を主眼に致します。佐久という広い地域に分散する会員の連帯こそ，佐久考古学会の発展と成果に欠かせない大切な仕事だと思います。まとまった研究や調査報告は佐久考古に，その他の会員の日常茶飯事に経験した感想，手記等など1，2行ですむものは多く捨てられています。そこで佐久考古通信にそれらをぜひ寄せていただき，1目で佐久の考古的動きや，各地のニュース，等などわかるような通信ができたら素晴らしいことでしょう。

会員皆さんの協力と，創造力で独特な佐久考古通信にしていただきたいと思います。

佐久考古学会新役員紹介

顧　問	手良　清
会　長	由井　茂也
副会長	黒岩　忠男，藤沢　平治
事ム局	木内　建 井出　正義，土屋長久，青木幸男，高村敏
委　員	金井重志，佐藤　敏，新村　薫， 武藤　金，三石近雄，由井　明， 土屋　忠芳
監査委員	畠山忠雄，渡辺重義

☆遺跡破壊の眼

武藤　金

今春，信濃の鎌倉とまでいわれている，塩田平の7史探訪をしたとき，上田の国分寺趾の記念碑に，岩永蓮代さんの銘があったのをみて思いだした。

何年前のことだろう、平城宮跡に車庫建設の問題が起きたとき，1人街頭に立って，文化財保護を訴え五千名もの署名を集め，陰の力となったり，その後も，丹波国分尼寺，武蔵国分尼寺、播磨国分尼寺，伊賀国分寺などの保存にたった1人出かけ，地元の県，市教育委員会に訴え，あるいは新聞に寄稿して世論を湧きたたせ，保存運動のきっかけとなり，成功させるなど，孤軍奮闘している。

又上田国分尼寺の保存保護のため，一坪運動を提唱して地元の世論を湧き立たせ，今日にいたらしめた事など，東京都杉並に住む岩永蓮代という一主婦の力。

それにつけても，国,県,市町村などの文化財保護行政の弱体と優柔不断に歯がゆさを覚えるのは僕1人ではあるまい。

埋蔵文化財破壊の元凶は開発である。その多くが、国や地方自治体，公社公団などの公共施設の建設にある。

開発によって破壊されるものがほとんどであることは心に銘記しておきたい。

☆土屋長久氏の詩を読んで....

高村博文

私が、土屋さんに初めてあったのは，ほぼ4年前の夏，和田村男女倉の発掘の時である。土屋さんは、両肩をいからせ，手の力をぬいてぶらりと取ってつけたみたいに下げせかせかと活動的に歩いてくる姿は，たいへん印象的であった。人と話しをしている時，目はいつも1点にとどま

ることなく興味ありげにあちこちと動きまわっていたことと思いだされる。

それ以来，同じ佐久平出身ということもあって，佐久で発振があるをびに，いっしょに生活をし指導していただいている。

そんなある日，私は土屋さんから公民館活動の一つとして創ったという詩を見せていただいたことがある。

ここに私がびっくりした詩の中の1編を紹介しよう。

座蒲団

土の上には床がある
床の上には畳がある
畳の上にあるのが座蒲団でその上にあるのが楽という
楽のうえにはなんにもないのであろうが
どうぞおしきなさいとすすめられて
楽に坐ったゃーびしゃこよ
土の世界をはるかにみおろしているように
住み馴れぬ世界がさびしいよ

私はこの詩を読んで実にすなおなもして，たんたんとした句調の中からなんとも、いい知れぬしんかんとした，あじ

けなさ，むなしさ，さびしさを感じたと同時に土のあたたかさ，親しさが肌にふれたように思える。

それは，土の上には，床の上に……，…の上にはと上へ上へと続く最初の3行の語句と業という文字で表わした抽象的概念から，私にしやちこばったしきたりとか，人間のつくった種々の規制を想像させ，そして上へめざしていることの反作用として，最後の2行の語句によって，逆に土のあたたかさ，親しみがにじみでてきているような気がする。

土屋さんはすなおで，良いにつけ悪いにつけ大人のずるさをしらず，又非常に感受性が強く自分をごまかすことができないから，人に誤解されやすい。でも私はそんな土屋さんが大好きです。

最近，土屋さんのまわりにおめでたの話もチラホラとか

わが先輩，土屋さんに幸多かれ！

◇事ム局だより◇

今日，佐久平においても文化財保護の問題が数多く起こっております。そんな時1人，1人ではとうていたちうちができず，多くの人たちの協力が必要です。又学問的水準においてもより高度な見識と知識をかねそなえていなければなりません。そんなかでたよりになるのは研究団体の存在です，本会もいままでの歩みを振りかえり，種々の弱体をおぎない，真に学問的研究団体としての役割りをはたすべく方向へ，1歩でも歩みださなければなりません，それには会長さんも述べられているように会員相互の緊密な連帯なしには考えられないことです。ここに佐久考古通信という，会員全員共同のらくがき板を設定し，会員総参加の活動をおこしてゆきたいと思っております。どんな，ささいなことでも，日常気がついたこと，感動したこと，大い

に結構です。らくがきのつもりで投稿してください。

事ム局長　木内 捷

▷新入会員紹介◁

小林	悦雄	983	仙台市原田小田原土手前1 東北大学松風寮
小柳	義男	384-14	南佐久郡川上村秋山川上オス小学校
中山	悟	389-02	御代田町三谷2044
花岡	弘	180	東京都武蔵野市吉祥寺東町1の1の14
林	幸彦	181	東京都三鷹市牟礼6の10の9 高橋荘
福島	邦男	384-22	望月町望月坂下 両沢要記方

佐久考古通信 1号

発行所　佐久市大字岩村田3.338の1
佐久考古学会事務局
木内 捷
TEL (02676) 7－4443

発行者 由井茂也
編集 木内 捷，高村博文

佐久考古通信

No 2
76. 3. 1
佐久考古学会

一　昭和五十年度第一回佐久考古学会総会報告
二　佐久考古学会会則変更議案
三　第二号議案
四　第四号議案
五　佐久考古学会地区委員紹介
六　新入会員紹介
七　住所変更
八　事務局だより
九　会費納入のお願い
十　編集後記

昭和五十年度第一回佐久考古学会総会報告

本通信版1で御連絡した通り、昭和五十年度第一回総会は十月十五日、岩村田の浅間会館大会議室において二二名の参加者をもって開催されました。

開会のことば、会長、事務局のあいさつに引き続き、満場一致で武藤会員を議長に選出し議事に入りました。

第一号議案である委員の件及び第三号議案である会費変更の件については、会則にふれるため一括して会則変更議案として行なうことを決定し、第二号議案・第四号議案とともに別紙の通り満場一致で承認されました。

そして議事終了後、閉会のあいさつが行なわれ、予定されていた記念講演のため、はるばる長野よりかけつけて下さった県文化財指導主事の丸山尚一郎先生による「佐久地域分布調査の成果について」の講演が行なわれました。県内一円の分布調査を実際に身をもって研究されておられる先生の実証的な科学理論を基に佐久地域における遺跡のあり方を、一、浅間山麓（小諸市、御代田町、軽井沢町周辺）二、平尾山周辺（佐久市東部）三、佐久盆地・田切り地形（佐久市を中心とした地域）四、立科山麓（川西地区）五、丘陵地帯（御牧ケ原周辺）の大きく五つに分類し、独自の見解を述べられ、日頃佐久にとじこもっていた、我々会員ことごとく目を開かれる思いのする素晴しい講演」した。改めて本紙を借りて先生に厚く御礼申し上げる次第であります。そして

そして講演の後、隣りの和室において懇親会が催され、会員間の親睦を深め、無事当日の日程を終了しました。

（事務局）

佐久考古学会 会則変更議案

第一条　本会は「佐久考古学会」と称する。

第二条　本会は会員の佐久地方における考古学的な調査研究を相互に援助協力進展し合い更にその親睦を目的とする。

――を「本会は佐久平における考古学研究の興隆を計るとともに、会員相互の研究、会員の親睦、文化財の保護を推進することを目的とする。」

第三条　本会の会員は、本会の目的に賛同する考古学研究者によって組織する。

――を削除し、新たに「本会の目的を達成するために次の事業を行う。」

1. 総会（年一回以上）
2. 学習会
3. 講演会
4. 調査研究
5. 「佐久考古」「佐久考古通信」の発刊

6. 埋蔵文化財の保護
7. その他必要なこと」

第四条　本会の目的を達成するために次の事業を行う。
1. 総　会（春季）
2. 例　会（原則として第一土曜日）
3. 調査研究
4. 見学会
5. 講習会
6. 会報「佐久考古」の発行――

を削除し、新たに「本会の会員は本会の主旨に賛同し、会費を納入した者を会員とする。」

第五条　本会の運営は会費と特別収入をもってあてる会員は会費年額五百円を納入するものとする。――を削除し、新たに「本会の運営の経費は次のように定める。
1. 会　費
ア　個人会員　年額一〇〇〇円
イ　団体会員　年額一〇〇〇円
（ただし、中、高校生については、年額五〇〇円）
2. 寄付及び補助金」

第六条　本会は次の役員をおく。
1. 会　長（一名）
2. 副会長（二名）
3. 幹　事（若干名）
4. 委　員（若干名）
5. 会計監査（二名）――を「本会は次の役員をおく。
1. ア　会　長（一名）：会長は本会を代表する。
イ　副会長（若干名）：会長を補佐する。
ウ　事務局（若干名）：事務局長一名と幹事若干名で構成し会務の執行を行う。
事務局長（一名）：事務局を代表し、会務の執行を統轄する。
事務局幹事（若干名）：会計幹事、書記幹事等その他必要な幹事
エ　委　員
佐久地域をⅠ地区（軽井沢町・御代田町・小諸市）Ⅱ地区（北御牧村・浅科村・立科町・望月町）Ⅲ地区（佐久市）Ⅳ地区（臼田町・佐久町・八千穂村・小海町）Ⅴ地区（北相木村・南相木村・南牧村・川上村）に分け四地区（佐久地域外の地区）を加え6地区とし、各地区の会員から若干名代表者を選出し委員とする。
オ　会計監査員（二名）本会の会計監査を行う。
2. 役員の任期は二年とする。但し再任はさまたげない。
3. 会長、副会長、事務局長、会計監査員の選出は総会において選出する。又事務局幹事は事務局長が選ぶものとする。」

第七条　本会の役員の任期は二年とする。但し重任はさまたげない――を削除し新たに、「本会は役員会をおき、会の運営にあたる。役員会の構成メンバーは、第六条第一項のアイウエの役員をもってあたる。」

第八条　本会は顧問をおくことができる。

――――を「本会は顧問をおくことができる。顧問は総会において推戴する。

第九条　本会の会則の変更は総会において決定する。

第十条、第十一条を新たに加える。

「第十条　本会の目的に反する行為を行なった者は除去することがある。」

「第十一条　その他会の運営に必要な規定は別に定める。」

佐久考古学会慶弔規定

第一条　会員及び会に、貢献した方に慶弔事が生じた際にこの規定を適用する。

第二条　会員の慶事には、お祝いを贈る。

第三条　会員の弔事には、香料を供する。

第四条　本会に貢献した会員に慶弔事が生じた際にはその都度役員会で協議して決定する。

第五条　本規定に対する慶弔に対するお返しはいただかないものとする。

第六条　本規定は昭和五十年十月五日より施行する。

第２号議案

昭和５０年度事業計画

項目／月	行事	発掘調査	学習会
10月	総会会（10.5）	下旬 佐久市 鳴瀬細田遺跡	10月3日　講演 日本考古学協会員　丸山　徹一郎氏 第1回　入門講座 （プレ）　林　幸彦氏
11月		上旬 佐久市 跡部町田遺跡	第2回　入門講座 （縄文前）　青木　幸男氏 第3回　入門講座 （縄文中）　藤沢　平治氏
12月	忘年会		第4回　入門講座 （縄文早）　福島　邦男氏 第5回　入門講座 （弥生その1）　高村　博文
1月	新年会		第6回　入門講座 （弥生その2）　白田　武正氏
2月			第7回　入門講座 （古墳）　[illegible]　長久氏

3月			第8回　入門講座 （歴史）　与良　清氏 第9回　入門講座 保護について　木内　捷氏
4月	総　会		講演　弥生について 日本考古学協会員　笹沢　浩氏

第4号議案

昭和50年度収支予算書（案）

収入の部

50,000円　内訳　会費1,000円×50人＝50,000円

支出の部

項目	金額	説明
謝金	10,000円	講師謝金　2回×5,000円＝10,000円
会議費	10,000	会場費・茶菓子代等
消耗品	15,000	紙　封筒　原紙　鉛筆　ボールペン等
備品	5,000	事務局印鑑等
通信費	10,000	切手　はがき　電話
予備費	0	
合計	50,000	

佐久考古学会

地区委員紹介

Ⅰ地区（軽井沢町・御代田町・小諸市）
金井重忠

Ⅱ地区（北御牧村・浅科村・立科町・望月町）
福島邦男

Ⅲ地区（佐久市）
佐藤敏・新村薫・武藤金

Ⅳ地区（臼田町・佐久町・八千穂村・小海町）
三石延雄

Ⅴ地区（北相木村・南相木村・南牧村・川上村）
土屋忠芳・由井明

Ⅵ地区（その他の地区）
臼田武正

☆☆☆☆☆☆☆☆☆ 新入会員紹介（アイウエオ順）☆☆☆☆☆☆

今井正晴　〒165　東京都中野区中野六ノ二二ノ八　山田方
大橋広行　〒236　神奈川県横浜市六浦町四〇七三
川上元　〒386　上田市上田博物館
川島雅人　〒354　埼玉県入間郡三芳町藤久保八一九ノ二二
寺島隆史　〒386　上田市上田博物館
前原豊　〒167　東京都杉並区井草二ノ二ノ一三　松山荘
丸山敞一郎　〒388　長野市篠ノ井布施五明三二〇ノ五
村山好文　〒165　東京都中野区大和町二ノ一一ノ八　ことぶき荘5号

××××学生会員×××××

小栗靖　〒385　佐久市岩村田稲荷町三二四〇　（浅間中学生）
佐藤修　〒385　佐久市岩村田相生町二一二〇　（浅間中学生）
提隆　〒385　佐久市岩村田西本町一三一七　（浅間中学生）
中沢秀幸　〒385　佐久市岩村田相生町一九三四　（浅間中学生）

住所変更

島川長久（旧姓土屋）　上田市中央西一ノ一〇ノ一九
（昨年十一月三日御結婚により姓が変りました。御両人の御幸福を紙上をもってお祈り申し上げます。）

青木幸男　〒389-01　軽井沢町星野温泉ホテル

事務局だより

「第一回入門講座の開催の予告」

諸般の事情で延期となっておりました第一回入門講座を近日中に開きたいと思います。講師に島川長久氏・林幸彦氏の両氏を予定しております。尚、会場等は追って御通知致しますので、会員のみなさんおさそい合せて御参加下さい。

期日は三月中旬に予定しております。

今年こそ、今年こそと思いながら、一九七六年も正月を過ぎての発行となってしまいました。事務局の怠慢を深くお詫び申し上げます。幸い我等佐久のホープ花摘青年の御協力により編集も終りホット一息というところです。また、No.2・No.3のタイプを会員である島出さんに御苦労を戴いたことを紙上をもって御紹介申し上げると共に、厚く御礼申し上げる次第です。原稿の〆切・制限はございません。どんな内容でも結構です。どしどし事務局までお届け下さい。

（CK）

会費納入のお願い

第一回総会で承認されましたように、本年度からの会費は次の通りです。

一般会員及び団体　一〇〇〇円

学生及び学生団体　五〇〇円

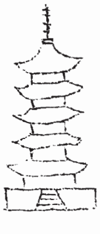
本会のスムースな運営のため、会費納入に御協力下さるようお願い致します。

編集後記

通信No.2をお届け致します。No.1の発行から、すでに四ヶ月が過ぎてしまいました。ひとえにお詫びする次第であります。

次号No.3は、すでに原稿が出揃い、間もなく発行の予定です。いずれも力作なので御期待に添えることと思っています。お楽しみに！

（H・H）



佐久考古通信 №2

発行所　佐久市大字岩村田3.338の1

佐久考古学会事務局

木内　捷

TEL(02676)7—4443

発行者　由井茂也

編集者　木内　捷　高村博文

花岡　弘　島田恵子

佐久考古通信

第３
１９７６，４，１
佐久考古学会

一　昭和五十年度第一回役員会報告
二　まぼろしの前方後円墳
三　佐久考古通信№１を読んで
四　再び会費納入のお願い
五　土屋さんのこと
六　編集後記

昭和五十年度第一回役員会報告

第一回役員会は、二月二十一日午後一時半より岩村田の浅間地区館に於いて、由井会長をはじめとして、十名の役員の出席をもって行なわれました。

会長さんのあいさつの後、木内事務局長の進行（司会）により協議に入り活発な意見がかわされました。協議事項及び協議内容は次のとおりです。

一、学習運営について

1. 会費の徴収方法について

会費の納入状況がよくないことが事務局から発表され、その徴収方法について話し合いが行なわれました。その結果、

イ 各地区ごとの会費未納者名簿を早急に事務局が作成する。

ロ イで作成した名簿を地区委員に手渡し、地区委員が正式会員把握を兼ねて地区内会員一人一人に徴収に当たる。

ハ 口座を開設し、各会員が会費をいつでも振りこめるようにする。（将来VT地区会員は佐久地域外の会員であり、ロの徴収方法ができないため、口座を利用していただくように）

ニ 学習会、講演会等、会員が集まる場を多く催し、会費納入の機会を増す。

以上四項目の徴収方法が出されました。

2. 佐久考古通信、学会誌「佐久考古」の発刊について

◎ 佐久考古通信

佐久考古通信は、第二、三号は近日中に配布の準備ができており、第四号においても、ほぼ原稿が出揃ったという事務局からの説明があり、郵便料の値上げにより多くの回数が発行できないという問題が事務局より提出されました。しかし、通信の速報性、連絡紙的意義から、できるだけ予算内でやりくりを行ない、数多く発行するよう努力することに決定しました。

◎「佐久考古」

「佐久考古」は、印刷費の値上りなどにより、一回に最低十万～十五万円の資金を必要とし、現在、運営資金は全く無く、とうてい発刊の見通しがつかないということが事務局より発表され、どのようにしたらよいか話し合いました。その結果、まず資金を作ることが先決であり、そしてどのように資金を集めるかということが大きな問題になりました。充分討議を重ねた末、「佐久考古」の3の発刊に際しては最低十万～十五万円の資金は必要であることが確認され、資金集めについては会員からの寄付の問題が出たため、総会に計った方が良いということになり、具体的な案は事務局が立案することになりました。

二、その他

◎慶弔規定の件について

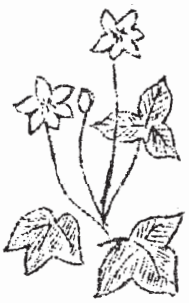
昨年十月五日の総会で決まった慶弔規定の適用範囲、慶弔にかかる費用を話し合い次のように決まりました。

・慶事は会員が結婚した場合で、三千円のお祝いを現金で贈る。

・弔事は会員が亡くなった場合で三千円の香料を供する。

※　本役員会の書記は、学会の若手のホープである花岡弘氏と佐々木豊子嬢にお願いした。

（事務局）



ZZZZZ　まぼろしの前方後円墳　ZZZZZ

木内　捷

昨年夏の埋蔵文化財分布調査中の出来ごとである。

佐久市の分布調査（県教委と市教委共催により昭和四十五年度より実施）も、いよいよ大詰になり、大沢、前山、岸野の山間部（平地は調査終了）を残すのみとなり、五月より続いた調査で調査員の疲労の色も隠せない炎暑の六月二十六日、岸野付誌の役員である高橋久保氏等の案内により、火の雨塚古墳、小金平遺跡、中島遺跡等を踏査し、いよいよ調査員の楽しみの一つである昼食時になり、案内役である高橋氏が「自分の持山である滝ノ峰に一寸した塚が二つあり、昨年そこを堀って炭焼きをしたら刀の破片が出てきて家にあるので見て欲しい」との事で拝見することになった。

氏が大事に箱に納めてある鉄片をみて驚いたことに今まで見たことのない両刃のある鉄片で、正しくそれは「剣」の破片で八騒ぎとなった。

高橋氏による現場での立地、出土した状況等を聞きながら「前方後円墳ではないか」と胸を踊らせ研究者仲間に連絡をし、午後、現地へ行く事となった。

意気揚々と集った十名余りで、氏の案内により夫れ夫れ、鋸、ナタ、鎧等持参のうえ自動車に分乗現地に到着、早速調査に入った。

県教委、丸山指導主事の指示により背丈の倍以上もある雑木等の伐採を汗だくになりながら、僅か一時間余りで行ない、二つある墳丘の全貌を表出した。

松の木（約六メートル）に登り墳形を見る者、メジャーを引張っる者、その賑やかさは〃前方後円墳〃であったらとの期待で、暑さも吹き飛ぶほどの騒ぎであった。結局、精密なる実測は後日実施する事にし山を降り、先

はめでたし、めでたしで話に花を咲かせて祝杯をあげるに及んだ。

七月三日、丸山指導主事を先頭に朝より山に登り実測を開始するも、時間を刻む毎に〃前方後円墳〃の期待は薄らぎ、皆ガックリ、暑さに負ける者も出てくる仕末と相成り、兎も角、実測を終了させ、最後の希望（実測図を古墳研究の権威者に検討依頼する）を残して下山した。

後日、県教委、丸山氏より連絡あり、実測図からは到底、前方後円墳にはならないとの解答を受け、竜ノ峰一号、二号墳と命名、まぼろしの前方後円墳〃となった次第である。

いずれにしろ、「剣」の出土した確証ある佐久市の古墳については、この滝ノ峰古墳だけで（中佐都小学校にあるのは出土地不明）佐久市最古（六世紀中葉…県教委、桐原指導主事）の古墳を発見したことには間違いなく、（今までは岸野、火の雨塚古墳が通説）数々の話題と意義ある成果を残し、滝ノ峰古墳から〃さようなら〃をした次第である。

滝ノ峰古墳よ何時までも健在であれ。

佐久考古通信 No 1 を読んで

（浅間中学生）　堤　隆

佐久考古通信の発行！おめでとうございます。

まず、武藤さんの「遺跡破壊の眼」を読んでの感想を述べたいと思います。

私は、「遺跡が破壊され遺跡保護を痛感しながらも、結局は指をくわえて遺跡が破壊されるのを見ている」、これが現状ではないかと思いました。

それに比べて、東京都の岩永さんという一婦人の行動は、なかなかできることではないが、しかし、私たちにできないということはありません。むしろ文化財保護は私たちに課された義務といっても過言ではないでしょう。保護の気持を、いかにして行動に移すかだと思います。

最後に佐久考古通信編集部の皆さん、佐久考古通信をますます充実したものにして下さい。

再び会費納入のお願い

先号でもお願い致しましたが、会費納入状況がはかばかしくありません。度々、失礼ではありますが御連絡の上、御協力下さるようお願い申し上げます。

尚、本会でも近日中に口座を設ける予定ですが、口座番号は追って知らせします。

土屋さんのこと

青木幸男

土屋さんの詩に接するのは今回で二度目である。一度目は立科町の下屋敷遺跡で行なわれた発掘調査の折、下屋敷速報に「春愁」という題で投稿されて下さった時。二度目は言うまでもなく、佐久考古通信の「蒲団」であった。いづれも一つの基点に向って転回する信如く、何か異様な光彩を放っていると言える。通その光彩が果して何を指すものかは、読まれた方がすでに観取されている事と思う。私は古考土屋さんの詩を介して時折、小林秀雄を思い久出す。

佐　小林は、詩人中原中也の追悼文の中で「詩人を理解することは詩ではなく、生れながらの詩人の肉体を理解することは何と辛い想いであろう」と記している。小林は言うまでもなく、日本に於ける批評家の先駆としてその才をふるっているが、その中でもとりわけ死に関する追悼文はいづれも異様に美しい。小林が多分一生のうちで、一番深い悲しみを受け、今もひきずれながら生きているのは、この中也との思い出に由来するであろう。

小林は周知の如く中原中也の愛人を奪った人物であり、それがいわば中也の破壊的、自己的激乏を遠からず招来させたとも言える訳である。小林は生前の中也を誤解し、曲解しながら接していた部分は少なからずある。先ほど小林の追悼文にどれも異様に美しいと述べたのは、死を契機にして始めて今まで幻であった部分の輪郭つまり深層をはっきりとらえることができたからであろう。詩人とはいかにも誤解されやすい表層をもっているのである。

考古学研究者としての土屋さん、民研究家としての土屋さん、詩人としての土屋さん、このすべてを通じて貫かれる一つの共通考ともいうべき流れがある。

土屋さんと出会ってから四年目、僕にとって土屋さんの生き方がたった一つわかっただけの気がする。土屋さんに関しては一度談会があれば書いてみたいと思っていた。今回の考古通信はよくその媒介を果してくれる作用をとるものであった。

編集後記

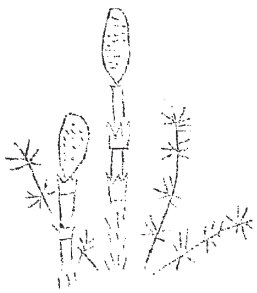
感謝をお届け致します。

もうすぐ、この佐久の地にも暖い春がやって来ることと思います。左党にとっては、「雪見酒から花見酒へ」といったところでしょうか。

春は住所変更の多い季節です。住所変更は早目に事務局までお知らせ下さい。

次号(5)も間もなく発行の予定です。

(H・H)



佐久考古通信第3

発行所：佐久市八字岩村田3338の1

佐久考古学会事務局　木内　捷

TEL(02676)7-4443

発行者：由井茂也

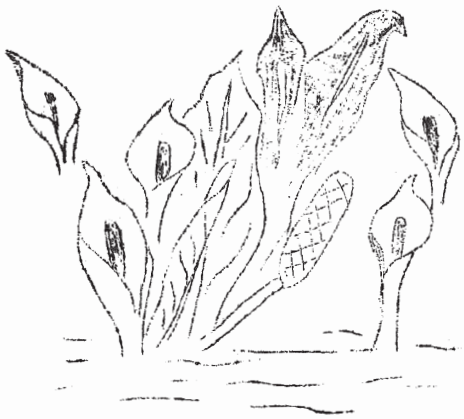
編集者：木内　捷　高村博文

花岡　弘　島田恵子

佐久考古通信

No. 4
1976, 5, 1
佐久考古学会

一、上州路への紀行
二、表採に想う
三、塩田城跡雑感
四、瀬戸の獅子舞い雑感
五、事務局だより



みずばしょう

上州路への紀行

佐藤　敏

昭和五十一年三月三日佐久市教委社教の高村氏より、次のような電話があった。「明日、市内常田の家地頭古墳より発掘出土した『埴輪』を、お隣の群馬県立博物館へ行って、群馬の出土品と比較対照をし鑑定をするので、都合はいかに」との電話を載いた。丁度そんな時、少し風邪気味で頭痛を覚えていたが考えて見ると、佐久地方では埴輪の既出物は、平根小などに展示されていて接見したことはあるが、発掘品として価値のある家地頭古墳の埴輪との比較対照であり、これを聞き頭痛も吹っとんでしまい、参加をお願いした訳である。

さて、いよいよ当日四日朝八時三十分頃岩村田の浅間会館へ来て見ると、南の方から、三石さん、武藤さん、岩村田からは井上さん、森泉（定）さんと木内さん、学生の林君、花岡君、市教委の高村君、御代田教委の島川さん（相姓土屋）のメンバーが集まっていた。（計十名）

都合によって八時半出発は出来ず、九時十五分に浅間会館を三台の自家用車に分乗して一路群馬へと車は発車した。

車は平賀、内山を通り二五四号線を疾風の如く、ただ黙々として走り嶮阻な山道も何のその、右側に荒船山頂の残氷を仰ぎ、富岡街道、藤井の関所へ来て、関所の写真撮影等しばらくタイムを取り、十時三十分頃目的の群馬県立の博物館へ到着した。入館してから、高村君より先方の館員、外山学芸員外二名に対して紹介があり一服する。遺物の埴輪も館内に運ばれて来た。午前中は、二階に陳列してある群馬県出土の三角縁神獣鏡や埴輪、その他の出土遺物などを見学して昼食となる。これで昼休み一時間を取り、近くにある群馬県一の宮貫前神社参神、経津主神。姫大神とあり関東特有の塗り物の鮮やかさである神社を参拝した。

貫前神社は、一の宮といって神社用語では、一の宮とは平安時代から鎌倉時代にかけて、諸国の有力神社につけられた呼称。これには時代により変遷があるが、いつどのような理由で定められたか、その由来については諸説があるが、朝廷または国司が指定したのではなく、その国において由緒深い神社、信仰の篤い神社に一種の序列ができて、その首位のものが一宮とされて公認されるに至ったと考えられている。

さて、このあたりで対比に移ることにする。並居る人々の目の輝き、何とも異様な顔々々。この瞬間一度に緊張して来る。対比結果は、報告書でということにして帰路につくことにする。博物館を三時頃出発して富岡市の笹森稲荷社にある前方後円墳の横穴式古墳を見学し、信州佐久では見られない古墳の内部に入って石室の配列などを見る。日本三大古石碑のある多胡の碑へと車は行く。やがて車は吉井町へ到着し、多胡碑の前にて止まる。

多胡碑の所在は群馬県多野郡吉井町入字池宇御門に所在する。七一一年の和銅四年三月の多胡郡創置の記念碑である。碑は碑身と笠石が残って居り、碑身高一、二六センチメートル幅六〇センチメートル、笠石高二七センチメートル、軒幅九〇センチメートル、軒厚一五

センチメートルで暦尺を使用しており、軒幅が三尺で、その2.倍が碑身高四尺二寸となる。石材は吉井町南部にある牛臥山の牛臥砂岩を各面にふくらみをもたせる様に加工してあって、吉井町の薬師塚や多比良古墳の裾石積石室（未見である）の石材と同質であり、同じ加工法といわれている。銘文は総字数八十字を六行に書き下していて彫りは深く、銘文は次のようになっている。

「弁官符に上野国片岡の郡、緑の郡、甘良の郡、並びに三郡の内の三百戸を郡と成し、羊に給して、多胡郡と成すとある。和銅四年（七一一）三月九日甲寅の宜なり。た太（大）臣は正二位石上尊、右太（大）臣は正二位藤原尊なり」

此の記事は「続日本書紀」の記事に相応して、郡の建置、郡司の任命、郡の命名を本文として建郡などの命令の宣布日付、その命令の取扱者のた中弁や、関係高官者の名前をつけ加えたもので建碑者の文である。弁官符とは、弁官から出された官符でこの記事に関しては、太政官符が郡の建置は民部省、郡司の任命は式部省から出されて、共にた弁官の取扱いである。羊は人名で、上野国分寺跡からこの墨書きの文字瓦が多数出土しているという。「令集解」の記事によると、「給羊」は羊を神前に供したことが推察される。「尊」は奈良時代の敬称と伝えられる。（中央公論美術出版）

さて車に乗し帰路につくと、又富岡へ戻り、車は松井田を目標に走る早春の碓氷峠の急坂を通りつつ、或は上野に出る者の印象が深く東国の人々は、「日の暮に碓氷の山を越ゆる日は、背奈のが袖もさやに振らしつ」と（万葉集）

「ひなぐもり碓日の坂を越えしだに、妹が恋しく心らえぬかも」　万葉の碑を見ながら、午後五時四十分無事出発点である浅間会館へ到着した。

運転手さん御苦労様でした。

表採に想う

花岡　弘

今、降っている雪がとけて、暖かくなるとそろそろ表採の季節である。ジーバンにズック靴といったいでたちで、畑の土を踏みしめながら歩くのは、何とも言えない気分である。

「オーイ、そっちはどうだい。」

「あんまり、わえずら。」

小学生の時分、ひまをみつけては友人のY君と近くの丸山まで、土器を拾いに行ったのを思い出す。丁度、郷土の敷石住居址が発掘された頃である。その頃の丸山は、一時間位で少ない時でも石鏃の二、三個は拾えたように思う。夕暮のそろそろ暗くなりかけた道を、その日の戦利品を持って家に急ぐ。

「今日は、だめだったなあ。」

「やっぱり、雨が降った後が一番いいなあ。」

あれから、もう何年も過ぎ、丸山にも家がいくつも建てられてしまった。

表採は、古代人との対話だというようなことを、「奈和」の小川さんが書いておられた

が、本当にそうだと思う。三月になって、ひまができたら、又表採に出かけたいと思う今日このごろである。

塩田城跡雑感

青木幸男

「塩田城址の発掘調査に関して」何か書くようにと頼まれ、二つ返事で引き受けてはみたものの、いざ書くとなるとなかなか面倒なものである。はじめから感想一辺倒であるのもどうかと思い、ついでに、塩田城址に関する概略的な説明を述べておこうと思う。以下先学諸氏の論ずるところの要約である。

塩田城址は塩田盆地を前方に展望する、独鈷山北麓のほぼ中央、標高約六百メートルを計る地点に位置する。城は、この山の傾斜面を削平して築造され、東西二十数段よりなる整地面によって、構成されている。今回の発掘対象地は、西裾より数えて九段目に相当するテラスにあたり、テラス群内にあっては、一等の面積規模をもつ。

城の歴史的変遷は、かなり複雑な様相を呈している。まず、鎌倉時代の信濃守護所と伝えられる、塩田北条氏を創始にしている点を挙げなければならない。この塩田北条氏が鎌倉幕府と命運を共にして滅亡した後、室町時代に至って、村上氏の重臣福沢氏がここを本拠となした。天文二二年　武田信玄の信州攻略作戦により、落城するまで、実に二百年の長きに渉る居城の歴史があった。落城を成功せしめた信玄は、その後、対上杉氏の前進基地として、七、八年間腹心の武将に守らせたという。徳川時代の初期にあっても、塩田組の大庄屋此の地、東部田に居を構えたとの記録が文にまみえている。

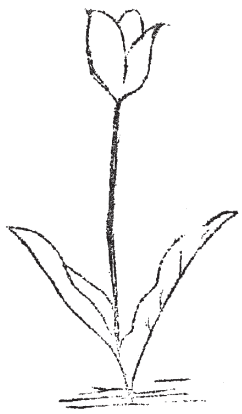
このよう塩田城址とは、いわば鎌倉時代から江戸時代に渉る数百年間、複合城址として当地方の政治的、軍事的要塞の根幹を果してきたといえよう。

さて、塩田城址の発掘調査であるが、幸か不幸か、雨がからずじまいの好天に恵まれ、一ケ月有余、調査の終了をみたのは、夏の終りを告げっせゝの声のたけなわであった。セミの鳴き声が塩田城だとすれば、さしずめ上ノ城はコオロギの鳴き声に対比されようか。とにかく、私にとって初めての試みである城跡の調査は、日々の一日一日が、貴重な経験の集積であった。これは、当初から計画されていた文献史学と考古学との相互扶助的操作より導き出された結果とが重なるミーティングに大きく由来しよう。私自身、本城址に関する予備知識といえば、僅か前記した程度ぐらいのもので、果してどのような遺構がどのような状態で検出され得るものか、皆目見当のつかない有様であったのを記憶している。

たしかに「城跡」を掘るということは、かなりの予察力と技術力を要するようだ。が、このことは、勿論城跡以外のどんな遺跡の発掘調査に於いても言い得る。翻って思うに、自分がしてきた発掘調査とは、例えばそれが縄文や弥生時代の遺跡、或いは又、土師時代の遺跡であれば向更、経験の豊富さからくる即物的な気易さと、常套手段とする手口とによって、場あたり的な調査がなされてきたと省察する。それ等の遺跡調査から得た成果はと言えば、単なる経験の追加、補強でしかな

かったような虚しい気持さえする。それは、考古学のイロハともいうべく現象と本質とを最も冷厳な態度で区別し得なかったことに起因するだろう。今、仮に現象が発掘より得られた遺構や遺物を明示するならば、本質とは、遺構、遺物の背後に潜む人間存在を暗示する結である。縁談の集積は、省察と前進とを約束づけ、そして手に握るスコップは、失敗の許されない手術用のメスであらねばならない。

私は、塩田城こいう一つの遺跡を通して、特に発掘を前提とする調査の場合、「海の男が生死を賭けて漁場に赴く」ような真剣さを改めて学んだ思いがする。それは、一度堀り返された遺跡が、二度と元の形に復することのできない、絶対無二なるものであるから。



瀬戸の獅子舞い雑感

高村博文

昭和五十一年正月十四日（水）、瀬戸の獅子舞を夕方七時頃から見学する。タイコ、笛の音にあわせておどる獅子舞、各家一軒一軒特有なはやしにあわせて厄払いをし、家々の繁栄と幸福を祈るよう祈ってねり歩く。それぞれの家では、誠に丁寧にしてお家によっては、御酒をふるまってもらえる。

七時半頃からであろうか、雪が降りはじめる。おふるまいにあずかった酒を立ち飲むとすっかり冷え切っていた五臓六腑にしみわたり、体の内部より熱気が沸とばしる。そのうまいこと、生きている実感も同時に味わう。

又、瀬戸の部落内にある道祖神の場所ごとに、お仮屋（露天の茶屋のような小屋）が四ケ所開設されており、そこは四方をむしろで囲み、中央には炉があって暖をわかしている。空をあおぎ、闇の中からたえまなく落ちてくる雪を見つめていると、まるで民話の世界にすいこまれたような錯覚さえ起ってくる。お仮屋には、おはづけ、たくあん、はくさい等のつけものと渋茶・甘茶の用意がしてあり、当番の奥さん達が訪れて来た人々にそれらをふるまってくれる。甘茶（あじさい科の甘茶の木から取る。昔は瀬戸の部落内に栽培されていたが、現在は買ってくるそうであるッ）は、初めてのんだのであるがたいへんおいしく、皆さんにもぜひ一度、飲みに出かけるようお勧めする。私は四ケ所の道祖神にそれぞれ五円のおさいせんをあげ、早くいい嫁ッ子がみつかるようにと祈ってきた。お仮屋のたき火の炎で赤々と照らし出された瀬戸の乙女はたいへんかわいらしく、昔の若い男性もこんな瞬間、恋の炎を燃やしたのではないかと想像して、つい私も恋をしたくなった。

事務局だより

大地の鼓動が日増しに大きくなってくる今日このごろ、会員のみなさんにはいかがお過ごしですか？春は活動開始の季節です。野も

山も一斉に息を吹きかえし、ほんの小さな芽の緑のきらめきにさえ圧到されそうです。人々もホルモンの分泌が活発になる季節とか。男も女も皆んな生き生きとして、たくましくあるいはきれいにみえます。

佐久考古学会にもたくさんの新入会員が入会され、いよいよ盛り上ったすばらしい会に発展することと思います。三月三十一日に行なわれた学習会も二十八名の参加者をもって開催され、林、島川両講師の熱弁により素晴しい学習会でした。又、本会員でII地区委員をやっておられる福島邦男氏が四月十一日に吉沢茂子嬢と御結婚されました。きっと素晴しい伴侶をめとって、これからますます御活躍することと思われます。

「佐久考古通信」も№4.まで発刊することができました。№1.にもあるように本通信は会員みんなのらくがき板です。日頃生活していて気がついたこと、ちょっとメモったこと、みんなに知らせたいこと、何でも結構です、どしどし事務局まで投稿してください。

本通信は、また会員みんなで育てる緑でもあります。まだやっと土から顔を出した程度の芽にすぎませんが、これからみんなで協力して大地に根をはる木に育てましょう。

(H・T)

佐久考古通信№4.

発行所：佐久市大字岩村田3.3.3.8.の1.

佐久考古学会事務局　木内　捷

TEL (02676)7-4443

発行者：白井茂也

編集者：木内　捷　高村博文

島田恵子

佐久考古通信

№ 5
1977, 2, 1
佐久考古学会

一、年頭あいさつ
二、昭和五十一年度総会報告
三、昭和五十一年度第二回役員会報告
四、秋の味覚と縄文の頃を想う
五、事務局だより

年頭あいさつ

会長　由井茂也

例のないような厳寒の中でみなさんお元気ですか。いつも物を言う時は必ずきまり文句で言い訳をいわなければならないような会から早く脱皮しなければならないと思いながら、相も変わらずそういうことになってしまいました。

六月の総会のあとは、夏の短い佐久の農繁期です。多くの会員の環境からこの間の事業の停滞は止むを得ませんが、秋の大会や見学会をストップさせたことは、ほんとうに申し訳ありません。その他、私個人の私事については御心配をかけたり、また大変お世話になりました。

また、佐久市後沢の緊急発掘調査には会員のみなさんの多数の御協力を得たことと思いますし、そこには現役で専攻されている学生達が大勢参加されていたので、実際の調査研究を通じ交流が行なわれ、本会の事業の空白を埋める大きな意義があったことと思います。

これから残された期間、充実した計画の遂行にあたることになっております。何かとよろしくお願い致します。簡単ですがごあいさつまで。

昭和五十一年度　総会報告

総会は、六月十三日、佐久市岩村田の旧広域事務所において三三名の参加者をもって開催されました。開会のことば、会長あいさつに続き、満場一致で武藤金会員を議長に選出し議事に入りました。事務局より昭和五十年度会務、会計決算報告のあと、会計監査委員両名とも欠席のため、会長代理による会計監査報告がおこなわれ、承認されました。

次に昭和五十一年度事業計画、会計予算の議事にはいりました。事業計画については事務局案どおり承認されましたが、会計予算については、寄附金の収入見込額が多すぎるため再度検討するようにという議疑が提出されました。総会の場で充分討議の結果、この件については役員会で再びつくりなおし、佐久考古通信の紙上をもって会員の承認を得るという案でまとまりました。

そして議事終了後、閉会のあいさつが行なわれ、予定されていた記念講演「長野県における旧石器時代」県考古学会事務局長、森嶋稔講師により行なわれました。講演は森嶋講師独特な人を引きこんでしまう話し方と、ユニークな石器（道具）の見方を、わかりやすく説明していただき、とても有意義でした。

そして講演の後、近くの食堂において懇親会が催され、会員間の親睦を深め、無事当日の日程を終了しました。（事務局）

昭和五十一年度　第二回役員会報告

第二回役員会は、一月二十九日、午後四時頃より岩村田浅間会館に於いて、由井会長をはじめとして十名の役員の出席をもって行なわれた。

会長のあいさつの後、木内事務局長の進行（司会）により協議に入り活発な意見がかわ

されました。協議事項及び協議内容は次のとおりです。

一、昭和五十一年度佐久考古学会事業計画について

このことについては、総会において承認されていた事業計画がいまだ一つもなされていないことの反省にたち二月～五月までの事業計画を、承認されていた計画をもとに、再度練りなおし、表１のように決まりました。

一、昭和五十一年度、佐久考古学会会計予算について

このことについては、役員会で再検討され、佐久考古通信の紙上をもって承認することが総会で決まっていました。

そこで本役員会で充分討議の決果、表２のように決まりましたので、本紙上をもって承認させていただきます。

（事務局）

昭和五十一年度事業計画

表　1

項目／月	事　業　名
2月	○　第一回学習会（２０日） 第一回縄文時代入門教室　藤沢平治氏 第一回遺物整理技術学習会　高村博文氏 ○　佐久考古通信No.５の発行
3月	○　第二回学習会（２０日） 第二回縄文時代入門教室　―後沢遺跡現場見学―　藤沢平治氏 ○　佐久考古通信No.６の発行
4月	○　第三回学習会 第三回縄文時代入門教室　藤沢平治氏 ○　第三回役員会
5月	○　佐久考古通信No.７の発行 ○　昭和５２年度総会

表 2

昭和五十一年度会計予算

収入の部

項	目	本年度予算額円	前年度予算額円	比較	説明
1 繰越金	1) 繰越金	28.160	0	28.160	前年度一般特別会計より
2 会費	1) 会費	65.500	50.000	15.500	62人×1.000=62.000 ㊖6人×500=3.000 1(団体)×500=500
3 委託料	3) 委託料	0	0	0	
4 学会誌	4) 学会誌	35.000	0	35.000	学会誌売上
5 寄附金	1) 補助金	0	0	0	
	2) 寄附金	0	0	0	
6 雑入	1) 雑入	340	0	340	
合計		129.000	50.000	79.000	

支出の部

項	目	本年度予算額円	前年度予算額円	比較	説明
1 報酬	1) 謝礼	15.000	10.000	5.000	講演会　講師謝金他
2 慶弔費	1) 慶弔費	10.000	0	10.000	
3 旅費	1) 一般旅費	0	0	0	
	2) 役員旅費	0	0	0	
4 需要費	1) 印刷費	40.000	0	40.000	佐久考古通信の発行
	2) 消耗品費	20.000	15.000	5.000	文具他
	3) 食料費	10.000	10.000	0	会議賄等
5 役務費	1) 通信費	20.000	10.000	10.000	郵送代等
6 備品費	1) 備品購入費	0	5.000	△5.000	
7 事務局費	1) 事務局費	10.000	0	10.000	車借上　行動費等
8 予備費	1) 予備費	4.000	0	4.000	
合計		129.000	50.000	79.000	

秋の味覚と縄文の頃を想う

三石延雄

秋とは言っても紅葉にはまだ早い彼岸前の日であった。私は茸取りに奥の山に行ってみた。日頃あまり人の通らない山路は草が生茂って、草をかき分けなければ歩けない。

赤谷の部落を過ぎると谷はV字形をなし、山は険しく、行く手を岩がはばみ谷は狭ばまる。川は谷の底を流れ、ある時は岩の間に淀み、又ある時は滝となって落ち、谷間を清流が流れて居る。

路は険しい坂道であり、又がけ道である。やがて雑木茂り、栗の古木立ちて原始林を思わせるような中に入る。

谷の流れの音にまじって小鳥のさえずりが聞こえてくるのみで、山は静寂そのものである。いきなり頭上でキャーキャーという甲高い声におどろかされる。カケスである。カケスが二声三声鳴いて去った後は又もとの静寂にもどる。

此の静かな山の中を歩いて居ると何時か読んだ事のあるこんな言葉を思い出した。「山は静にして原始に似たり」此の山の中は、そして此の静けさは原始の頃と変らないのではなかろうか。

道は奥に進むにつれて木葉が深くなり、時々何かが歩いた足跡がある。或は熊の足跡であるかもしれない。みずなら、こならなどの犬木の上の枝が内側に折られて木の上にたたのような物が出来て居る。熊が木の実を取って喰った跡であり、此れを熊の折りかけとよんで居る。

私は山に落ちて居たどんぐりの一つを拾って、その皮をむいてかじって見た。熊や鳥が喰って人間に喰えぬはずはないわけであるが此れはとても渋くて喰えたわけの物じゃあない。人間の消化器や味覚は長い間に此のような物は喰えなくなったのかもしれない。結局こんな事を考えながら、山を歩き回って、やぶ茸とさくら茸を少し取っただけだった。

この山の途中に岩陰があり、縄文前期、中期、弥生、土師、須恵器などの破片が採集されて居る。

私は秋の山の味覚の思い出をたどって見た。秋の山の味覚は何と言っても茸である。松茸シメジを初め喰える茸は数えきれ無いほどある。そしてそれぞれの持味がある。又果実類では栗である。栗は今はクリタマバチの被害を受けて、ほとんど結実しなくなって居る。今では栗拾いは一つの思い出でしかない。親ゆびの爪に渋をこびりつかせてコリコリと生の栗を喰った味。又囲炉裏のほどの中でぶすっと鋭い音を立てて栗の焼ける音など今ではただ一つの思い出である。又夜は家中で栗の皮をむきシラジでごしごしと渋を取り、栗飯をしたものである。これは一つには米の足しにしたのであった。

次に思い出の木の実をあげて見る。

・栃の実　栃の実については栃味曾、栃やきもちなど、話は年寄りから聞いた。しかし、この地方にはアク抜きの法は伝って居ない。子供の頃栃の実をくだき水に入れ麦わらのストローでふくと、ぶくぶくシャボン玉のようなアワが出来た。此れをとちばんぼくと言ってよく遊んだものである。

・どんぐり　どんぐりは「しいだんば」と言った。此れも食べる法は伝って居ない。

・山ぶどう　酸味が強かったが山の味覚の一つであった。

・まつぶどう　まつぶどうには黒く熟する物と赤い物とがある。共に松のにおいがし、赤い方は特に酸味が強く共に薬用とも言われて居る。

・ひらくち　所により「こか」とも言うらしい。此れは熟すれば甘くてうまい。然し多く食べると舌があれた。

此の外あけび、またたび（此の実はあまりうまくない）やまなす、えび、こなし、山なし、ずみ、此れ等が私の子供の頃山で食べ、そして遊んだ山の思い出である。

山にはやがて木の葉が落ち尽くし、雪におおわれるまで此れ等の食べ物は有った。縄文の頃の人たちも此れ等の物を食べ、又秋は味覚の秋であり、収穫の秋でもあったのではなかろうか。

私はこんな事を思いながら山をくだった。

；；；；後沢通信1より抜粋；；；；

事務局だより

四号発行より八ケ月を数えました。いつも思いながらの遅刊をお許し下さい。

今年こそ、今年こそと思いながら新らしい己年を迎えたわけです。あの縄文時代（中期）の土器に施こされた、世界七不思議の一つである毒蛇の文様にあやかり今年こそ素晴らしき佐久考古学会に発展するよう祈念するものです。

新年早々に会費の納入状況を申し上げる事は誠に恐縮に思いますが、十二日現在で約六十%の納入状況です。我が学会発展のため速やかに納入されるようお願い申し上げ、益々佐久考古学会が発展するよう会員の皆さんの御協力を切にお願いします。

学習会が始まります。我等の仲間による勉強会です。友人等おさそい合わせて御参加ください。

近年まれにみる、寒波の襲来で佐久の春もいまだ遠い感じがしますが、我等の胸中は後沢遺跡の調査を始め、保護せねばならない遺跡が沢山あります。これからもますます一致団結し、遠い祖先が遺した文化遺産を守ってゆきましょう！　（T・K）

佐久考古通信を久しぶりでタイピングした日の夜の夢は、後沢遺跡で学会員の皆さんと発掘している夢でした。

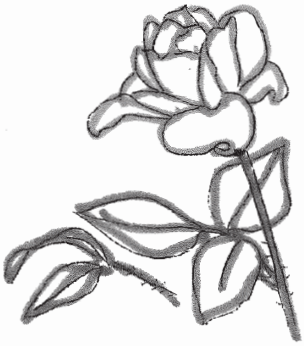
起床して外を見ると、昨夜降ったのか一面の銀世界、春が待たれます。心は後沢遺跡発掘調査へと飛んでいるのですが、春は名のみの風の寒さ……が身にしみます。（K・S）

佐久考古通信 No. 5
発行所：佐久市大字岩村田1040の7
佐久考古学会事務局　木内　捷
TEL（02676）8－0617
発行者：由井茂也
編集者：高村博文　林幸彦
花岡弘　島田恵子

佐久考古通信

No. 6
１９７７,３,２０
佐久考古学会

一、信濃佐久平古氏族と古墳について
二、臼田の由来
三、考古学的視点、美術的視点
四、たわごと
五、跡部町田遺跡雑感
六、雑　感
七、事務局だより
八、編集後記



ばら

信濃佐久平古氏族と古墳について

土屋長久

昨年、冊子をまとめたが、以下気づいたことを述べたい。

古墳の地域的研究については、藤森栄一氏『諏訪地方古墳群の地域的研究』に示唆されるところが大きかった。

卒論で、佐久地方の古牧の成立と後期古墳群を扱ったものの、当初、上田高校の郷土班で、真田氏の調査に併行し、軽井沢の、長倉牧址を追求したこともあって、西岡氏の荘園史（岩波文庫）の中より、中世以降、牧場の軍馬を富とした氏族が武士団として、東国で発展する中で、もっぱら氏族とその範囲の史料調査が主体であった。ただし中世豪族の発生を古墳時代へ求める発想を行ったが、資料集成にとどまった。

先輩から、「後期群集墳の発生と展開を、古牧と古氏族からあつかってみては」とヒントを示された。以降、上野と甲斐国に接する佐久地域の古墳その他を、学会誌、信濃に発表したレポートを主に、踏査と文献から再記述して、自分なり解釈し、第一段階として古墳資料の集成にとりかかった。

昭和四十三年～四十七年度まで、県下各地域の緊急調査の中で、多くの県考古学会員、先輩、諸先生に接し得たが、当時、調査団編成が整わないといわれたのが佐久平であった。

歴史の時代は急テンポで進展し、佐久考古学会が今日の様に発展と努力が重なれるに及んだ。昭和四十五年度では、日誌のメモからみるに、原稿（四〇〇字づめ）三六〇枚、図版作成八〇枚に達し、まさに、卒論なみの仕事で、やや精密さに欠けていたことを反省している。常に時間にも追われてもいたし、調査期間は、費用で限られ、次には緊急調査の悲哀ともいうべきか、長日かかった遺跡も、あっと五分もたたず開発の為に破壊されてゆくのであった。

やがて、御代田町教委に入って、佐久平の古墳のレポートと、分布一覧表、既出資料を再整理してみた。資料報告をのぞいて、考察に準ずるものはすべて、考え方や見方が、異っていた。さらに、古墳ひとつを基礎資料としても、

一、古墳はその石室が開口していた。

一、既出遺物も、その出土位置が判然としていない。

一、近世～近代、石室の石が他に利用され墳丘もほとんど原形を留めていない。

一、発掘調査に際しても、ほとんどが盗掘状況を示し、関東や、畿内の古墳と対し集成に非常に頭をいためた。

以上から、完ぺきの地域研究に至るには、方法論が確立しない限り大きなかべに接した。従って、レポートの集成本と至ったのが本書である。最終校正で、直せる範囲は改めたが時間がなかった。出版の様な事は、軽井沢町で、叔父水沢邦夫が「軽井沢町文学散歩」を編集し、その後、軽井沢町教委からの「軽井沢町の文化財」についての冊子の依頼もあって、始めは、文化財の概説、あるいは、やさしく書き改めたものの予定であったが、第一段階として資料の集成本の姿勢となってしまった。もちろん出版費の頭金も、科学奨励金に予定していたのが、おちてしまい、この様になった。

題は、「佐久の古墳」であろうが、序文のことで東京の国学院大学、大場先生へ伺った折、先生は装飾古墳と古氏族の移動についてふれられ、古墳の解明と結論からして、長い表題となった。しかし、本文の末に「佐久平古氏族の性格とまつり」と題し、レポートをまとめたが、よく考えてみると、信濃における佐久平の位置が、上野国、甲斐国にも接しており、充分分析が必要であり、登載しなかったが、次の機会に、原稿を再整理してみたい。

信　出版についての費用とその発送範囲について、参考の為、記すると一千部印刷のうち、通　費用二百六十万円。贈呈二〇〇部、保存二〇古　〇部、頒布六〇〇部で行ったが、大部赤字と考　久なったものの、今日、考古学ブームで、一冊佐　三千円の本で、五〇〇冊はハケルというめやすであった。

会員の皆様に今後共御協力をお願いします。

臼田の由来

黒岩忠男

一説によると、臼田町がその昔、美里の郷と言われていた項、この辺に長門守正重という人が城を築いていたそうである。伝えるところによると後醍醐天皇の頃、小野左中将好村という人がこの地に流罪されていて、その後お許しがあって帰洛されたとき、正重が好村に仕えていた縁故から賜わったのが此の城であるそうだ。

ところが、その後のある夜のこと、正重がすやすや寝ていると枕頭に一人の老翁が現われて言うことに、

「光りさす松の根もとに大石があり、その下の石臼の中に稲穂が三つ入れてある。土中に埋もれていることが年久しい。お前が来てこの石を取り石臼を掘りだしその上に宮を建てよ。我は駿河の三穂の明神と一体分身である。崇敬すればお前の子孫は彼の松の葉のように栄え繁昌すること疑いなからん。」

と言い終るか終らぬうちに夢は覚めて消えてしまった。そこでお告げのように、翌日、村の辰巳の方に行って松の下をみると果せるかな大石があったのでこれぞとばかり、其の下をみると石臼の中に稲穂が三つ入っていたので、神変不思議のお告げもあるものと、直ちに駿河の三保から大明神を勧請して祀ったと言う。そして臼の宮と名づけたこの地方が臼田と言われるようにもなったのだと。

さて、この伝説は、民俗資料の蒐集にあり思いだして、五、六人の古老に聞いてみたが石臼のあった場所は、「臼のもと」と言うところがあるかと言うことは知っていたが、伝説については知らなかった。

考古学的視点　美術的視点

提　隆

考古学ブームといわれる昨今、人々の眼が遺跡に関心をむける。これはとてもよいことである……。しかし、そのほとんどの眼はいわゆる「宝探がし」的に発掘をとらえ、遺物は単なる美術品としか考えていないのではないだろうか。つまり、井戸尻の水炎形土器が優品で、たった今、ひろったばかりの土のこびりついた土器片はなんの価値もない。この考え方はいつかは必ず「破壊」につながる考え方なのである。こういう人たちには「一

片の土器片は何冊かの歴史書より貴重である」ということを認識してもらいたい。しかし、こういう私も、ともすればそうなりがちなのである。……

したがって、人々の眼を考古学にむけるか、美術いや、破壊にむけるかは、これからの努力しだいではないだろうか……。

一片の土器片は何冊かの歴史書より貴重なのである……。

たわごと

武藤　金

「おばあちゃんは、毎日寒いのに、なにやりに行くだい。」

「おばあさんかい、おばあさんはな、市の教育委員会に頼まれてな、小宮山の後沢というところへ発掘に行っているだに。」

「発掘ってなんだい。」

「発掘ってな、ほら、この間の新聞に出てたように遠い昔の人が住んでいたところを掘って調べることだよ。せんだってはな、とても綺麗な模様や飾りのついた土器のかけらが出て、なんていったっけな、綾杉文とかいったっけさ。六千年も昔の人が作った縄文だとみんな喜んでいたぞ。市内では初めてで、めずらしいそうだ。」

「おれもみたいな。」

「寒くってもな、おばあさんには、とてもいい勉強になるよ。縄文とか弥生とか実物にさわってみたことは初めてだよ。おじさん達や、勉強に来ている大学生のお兄さん達もよく説明してくれるし、歴史のことも話をしてくれて家にいるよりとても楽しいよ。和田峠から出る黒曜石でこしらえたヤジリや、そのかけらや、石の包丁も出てくるからな。お前も休みには来てみろ。」

「矢の根や土器は学校で見たけれど、掘るところへ行ってみたいな。」

「こないだの風の吹いた日は、とっても寒かったよ。たくさん着れば体がもとらないので、孤を背中にしょっていた人もあったよ。おばあさんは一輪車をついていたから……。」

「そんなに寒くてもいくだかい。」

「うん、大勢で仕事をしているから面白くて休めないだ。」

「そんな寒い思いをして掘ったのを市ではどうするだい。去年なも掘っていたじゃないかい。」

「うん、佐久市だけでも古墳をいれれば三十ケ所も掘ったそうだよ。」

「それで、その掘ったのはどこにあるだい。」

「それはな、この間もお茶休みの時におじさん達が話していたけど、段ボールの箱へ詰めて岩村田のどっかの室を借りて、積みこんであるそうだ。」

「それじゃ駄目だに。僕達には見られないに。」

「仕方がないそうだ。市では庁舎を造ったり、学校を建てたりしてお金がなくて陳列する所や、しまっておくところが建てられないだと……。」

「おばあちゃんが仕事をしているところへ市長さんも見に来るかい。」

「十月の初めから発掘しているが、いき会ったことはない。市の係りや開発公社ではいつも見にくるが……。」

跡部町田遺跡雑感

高村博文

信州の冬の掘りごたつ―真赤におこした炭を灰の中にかきわけながら入れ、センベイぶとんをかけ、こたつの中に腰までとっぷりと つかってついうたたねをした―そんな子供の頃の思い出がふと、うかんでくる。〃ふるさと〃ということばで、うかぶものといわれたら、そんなことをきっと心の中で思うような信気がする。

寒風はまるで、ほほをカミソリで切ったような痛さを、そして生きていることの実感を考運んでくれる。それは決して暖房のきいた部久屋の内では味わえない、赤々と燃える火の暖佐さを、ゆらゆら立ち昇る水蒸気に親しみが湧き、人々が集まって肌と肌を寄せあい、今までまったく知らない人にさえ親近感を覚えさせてくれる。

土、日曜ごとに息をせき切って自転車でかけつけてくる中学生の瞳の中にも赤々と燃える火がある。七十才近くになったおじさん達の目の中にも同じような火が燃えている。遺跡の北方にそびえ立つ浅間山をみながら、ふとこんな人達に会えた私は非常に幸福だと思った。――跡部町田遺跡通信No.1――

雑感

島田恵子

昨年十月より、考古学会に入会してから私にとっては初の長期的な発掘（俊沢遺跡）に参加する機会に恵まれた。

体力がない上に、土運びやスコップをにぎったことなどまるで経験したことのなかった私には毎日毎日が非常に「しんどい」作業であった。草刈りからはじまって、毎日毎日土運びだけの日が一ケ月も続いた時は、「なんのためにこんな苦労をしなければならないのだろう？」と考え込んでしまったこともたびたびあった。

しかし、そんな意気地のない私にとって、考古学会員諸先輩の、発掘に対する情熱と謙虚な態度、人間的なあたたかさを、日々の触れ合いの中で接して、こんな私でも、迷惑をかけながらも諸先輩の後に続いてゆけるものなら、なんとか最後までやりぬきたいと考えるようになった。

十一月のある日、三石さんと由井さんの指導を受けて三人でプランを練った。この日初めて発掘に対する深い喜びを味い、と同時に一ケ月以上の経験と、林主任の指導とによって受けた知識を、私なりのリポートにまとめあげることができた。未経験な私には、毎日毎日が新しい発見であり、新しい知識を吸収する場でもある。しかし、一ケ月のうち半分だけしか参加できない自身の体力のなさには、はがゆいばかりである。

発掘から離れている現在、会う人々に折りにふれ、埋蔵文化財保護の重要性を強調するのであるが、その無理解さと考え方の相違に大きなとまどいを感ぜずにはいられない。一体どんな方法で多くの人々に理解を待てゆけばよいのだろう。結局今までしてきたことは

自己満足だけではなかったのか？そんな思いがしてならない。しかし、そんな思いの中から得た結論は、私自身がもっともっと埋蔵文化財に対する知識を学び、その中から得たものを軸にして、保護の大切さを訴えてゆく方向を見出すべきではないだろうか？ということである。

事務局だより

(一) 第一回学習会開かれる！

先に通知したとおり、第一回学習会が二月二十日、岩村田浅間会館に於て由井会長をはじめ会員十五名の参加者をもち、午前十時より開かれた。午前中は、高村氏による遺物実測図作製作業を行ない、話しが長すぎて、実際に実測作業をする時間が少なかったことはたいへん惜しまれた。今回は形を正確に作図することを主眼に行なったが、自分で何かを一生懸命やっている人々の顔は、はつらつとして楽しそうだった。

午後は、藤沢先生による縄文時代の土器の学習会が行なわれ、最初に、現在使われている型式について説明を行ない、そこから考古学で研究対象となる遺物についての見方を現在ちょっと早急に設定されている型式名を批判しつつ、もっと大きなつながりの中で様式としてとらえていかなければならない、という方向性を打ち出した。次に、縄文時代の器形分類方法等説明を行ない、多少難解な所もありましたが縄文時代の創草期から前期まで日本的視野に立ち概説を行なった。最後に由井会長が持参した縄文式土器の写真と、後沢遺跡出土の土器を見ながら説明を行なったところ、次回はぜひ会員が持っている縄文式土器を実際に見ながら学習会をすすめていったらいいという皆の要望が出、次回は、現物の縄文式土器による文様を中心とした学習会を行なうことになった。

今年度はじめての学習会でしたが、自分達で実際に参加し学習できたことは、たいへん有意義であり、これからもどんどん続けていきたいと思います。

(二) 佐久考古通信担当幹事紹介

今まで、佐久考古通信を№5まで発刊できたわけですが、この担当幹事がいないまま発刊されてきました。そこで、本会会則第6条の3項により、林幸彦会員、花岡弘会員、島田恵子会員が担当幹事として事務局長より選出されたので紹介します。これから増々活動が活発になることと思います。又、会員のみなさんもどしどし原稿をお寄せください。

編集後記

長くて厳しかった冬も終り、すべてのものが躍動を始めた春がやって来ました。佐久考古学会も機関紙も順調な活動を開始しております。大きな躍進を！（KS）

佐久考古通信 №6

発行所　佐久市大字岩村田3338～1
佐久考古学会事務局
木内　捷
TEL　(02676)7　4443

発行者　由井茂也
編集者　林幸彦
花岡弘
島田恵子

佐久考古通信

No. 7
1977, 5, 25
佐久考古学会

一　英田地畑古墳と蔵手刀
二　洞源山貞祥寺の三重塔婆
三　前山の歴史
四　事務局だより
五　編集後記

あやめ

英田地畑古墳と蕨手刀

黒岩忠男

英田地畑古墳は新海三社神社の旧境内に当る所にあり、現場は墳丘もなく一見普通の畑地で、地籍は臼田町大字田口字英田地畑である。

新海神社は古くから佐久地方の惣社と称され、神宮寺も併存していたし、いまも地名に東坊、西坊と言われている所があり、その西坊と呼ばれている所が英田地畑古墳のある所である。

昭和四十年一月、畑の所有者鷲見達氏（旧制野沢中学の同級）が、畑を薬用人参畑にするため、地下一メートルほど天地返しをしていたところ、たまたま鍬の先が金物らしいものに当ったので、掘り出してみると刀二振が出土した。更に附近を掘り拡げると、土器数片と鉄器、人骨らしいものも出てきたという連絡があった。

行って見ると、刀は蕨手刀と直刀、土器片は須恵器と土師器の破片、鉄器は鉄鏃の破片であり、又人骨の粉末化したものに木炭がついていた。更に現地まで行って調べてみると、石囲いの西側寄りに粉末化した人骨が細長く横たわり、その下に木炭が砂礫の上に薄く敷かれていたので古墳石室の基部であることを確認し、四十年三月末清掃発掘の運びとなった。

古墳は石室の基部のみで、積石等は全く破壊されており、蓋石などのような大きな石は何処かへ運び去られて無く、附近の石垣などを探して見たがそれらしいものはなかった。羨道も押しつぶされて変形し狭くなっていた。恐らく新海三社神社の西坊敷地になったり、畑になったりして移動がかなり行われたりした結果によるものであろう。

古墳の構造規模は、はっきりわからないが全体から見て、横穴式石室をもつ小規模な円墳と思われる。玄室内部はおよそ短形で東西約一メートル、南北約二メートル、羨道は南に向いていた。床面には砂礫が薄く敷いてあり、その上に同様に薄く木炭が敷かれ、人体は西壁寄りに南北に細長く伸びていたが、詳しい埋葬の形はわからない。

蕨手刀は刀身全長四八糎、柄の懸通孔の上に青銅の菊の彫刻が装飾として付いていたが緑青になっていた。柄と身は共作りである。全体に腐朽が非常に強かった。

尚、田野口から大奈良にかけて平地の畑一帯には、大半破壊されたが俗称十二塚・四十八塚等の古墳群があり、

割塚古墳群・幸ノ神古墳群・外丸間古墳群中原古墳群・新海神社古墳群・上宮代古墳群等がそれである。英田地畑古墳は新海神社境内の古墳群のつづきとしての一古墳であり、英田地畑にはまだまだいくつかの古墳が存在したのではなかろうか。その後英田地畑地籍の新海神社寄りの畑から、直刀一振と須恵器の破片が発見されたことも耳にした。

洞源山貞祥寺の三重塔婆

調査　井出正義

この三重塔婆は、もと小海町の松原湖畔の神光寺に在ったもので、明治初年の神仏分離令、排仏棄釈により、神光寺は廃寺となり、明治三年四月十八日三重塔は前山の貞祥寺に

売り渡され現在の地に移築されたもので、再建二十一年目。

神光寺には古くから、源頼朝の寄進によるといういい伝えをもった三重塔があった。が、文政十二年（一八二九）松原村全焼という災禍にあい焼失。

神光寺別当が三重塔の再建を計画して、名匠の名高い野沢村の宮大工、小林源蔵昌長（三代目）を棟梁として工事を進めたが、上棟を目の前にして、弘化二年四月四日、工事小屋から出火、三重塔の切組物を残らず焼失してしまった。

弘化四年に再び再建計画ができて、また小林源蔵にまかされた。失火の責任を感じていた小林源蔵は、こんどは、長男の小林市太郎を棟梁に推し、養子にだした二男啓長、三男勝長もよびよせ自分はその後見人となり、親子こぞって再建にあたった。（小林市太郎昭長十九歳四代目）議定書によると、

野沢大工棟梁　小林市太郎
小諸家中大工棟梁　立川覚之助
南相木大工脇棟梁　高見沢賢蔵
野沢大工後見　小林源蔵

外に中小田切村清水宗兵衛も脇棟梁として参加したといわれる。

杣方棟梁　稲子村井出栄助
屋根葺師　小諸藩田中平作
鋳物師　岩村田宿犬王伝左衛門
　入沢村山形孫平治

小林源蔵は、着工半で消失したことを思い金拾両を神光寺に寄進した。

嘉永二年（一八四八）八月十七日に完成、着工以来三年目。

請負金額金六拾両と扶持米六拾俵

前山の歴史

井出正義

[illegible]科山がすそをひいて佐久平に落ちるところ、その接点に旧前山村が存在する。前面に展開する平地には流れのゆるやかな片貝川が山麓線に沿って、そのすそをめぐり豊かな水田地帯を形成している。背後には傾斜のゆるやかな山麓台地を負い、それを奥深くたどれば[illegible]科山の左肩のあたり、大河原峠を越えて諏訪郡に通ずることができる。

原始時代ここに住んだ人々は、片貝川で魚をとり貝をあさり、背後の台地や山麓では獣を狩り、栗や楜などの木の実や山菜を採って自然の恵みを豊富に受けて生活したものと考えられる。

前山地区では、まだ、旧石器や縄文早期の時代の遺物は発見されていないが、今後、前山開拓付近から標高一二〇〇米内外に及ぶ[illegible]科山麓に於て、その発見が期待される。

縄文前期になると、現在発掘調査の行なわれている後沢で、有尾式、下島式、南大原式等にあたる土器の破片が多く発見され、信濃史料にも記載されている。さらに今回の発掘では既に関山式（神の木式平行）と思われる注口付土器のすぐれた文様の土器片が発見され、今後の成果が期待されている。

縄文中期になると、小宮山の塚田（平地）や前山の滝下（熊の湯付近台地）で加曾利E式土器が大量に発見されている。熊の湯の前の畑地には、炉址も存在しており相当の集落があったものと思われる。

縄文後期の遺物は、やはり滝下に堀之内、

加曾利B式土器が出土している。

弥生時代に入ると、前山地区の出土遺物の豊富さには、目を見はらさせられるものがある。これは片貝川流域の湧水の豊富な低湿地が、原始的水稲栽培に最も好適な条件をもっていたからと考えられる。小宮山の後沢・諏訪神社境内、前山の滝下、下村の大門下、十二塚等には弥生式後期の箱清水式土器が大量に出土している。特に現在発掘調査の行なわれている後沢は箱清水式の標準遺跡とされ、大量の箱清水式土器と太形蛤刃石斧等を出土している。また大門下からは箱清水式かめ、櫛目文朱塗壺、無文朱塗土器を出土している。滝下と十二塚からは石包丁が発見されている。

古墳文化時代の遺物としては、前期のものは大門下から小形鉢、こしき、坩等が発見されている。後期のものは、やはり大門下から高台付盌、滑石製紡錘車、鉄剣、鉄刃片、須恵器の壺、皿、坏が、後沢からは土師器と須恵器の破片が発見されている。なお下村（台地）からは勾玉が出ている。また、片貝川対岸の桜井、三塚、泉小学校敷地から洞源湖の東方付近に至る地域にも土師器、須恵器の出土地が多い。

古墳数は以外に少なくて、大堰一・小宮山の地の眼に三基で、いずれも横穴式である。

六～七世紀ごろには、片貝川下流域の稲作はかなり発達して、人口も増加したものと思われる。大和朝廷がこの地域に県を設定したことは、いま岸野地区に下県の地名が残っていることからみて推定することができる。いまの下県から前山付近の片貝川下流域の米作地帯に大和朝廷の県が置かれたものであろう。

大化の改新によって、国、郡、里制が布かれ、里はさらに郷と改称された。一郷五十戸が原則とされ、水田は条里に区画され、班田収授の法が実施されたのであるが、いまその跡を認めることはできないが、小宮山に、条里制の測量の起点といわれる「地の眼」という地名が残っていることは見逃すことができない。

平安時代の中頃書かれた和名類聚抄に、佐久郡には七郷が記されているが、そのうち岸野、前山地区を中心とする片貝川流域一帯の水田地帯は刑部郷とよばれていたものと考えられる。刑部郷は全国に十五あり、允恭天皇の皇后忍坂大中姫のためにその御名代部として、当時、その地方の米作の中心地に設定されたものと考えられる。

七～八世紀ごろには、大伴氏の勢力が、弘法山古墳のある松本平から東信地方にのび、上小地方をへて、さらに佐久郡に入ってきたことが、日本霊異記の小県郡嬢の里（和名抄の童女郷）の大伴連忍勝の説話や、また佐久郡の延喜式内に大伴神社があることなどによって推察できる。

大伴氏は刑部郷を中心として、片貝川の流域に沿って、さらに開拓をすすめていったものと思われる。現在小宮山に残る「伴野」の字名は、こうした大伴氏との関係を示す地名であり、大伴氏が祀った式内大伴神社もこの水田地帯のどこかにあったはずである。

班田制の崩壊と共に、この地方は大伴氏によって荘園化され、伴野庄と称されるようになる。伴野庄は、その占有権を確保するため中央貴族の藤原氏を領家職とし、平安末期にはさらに皇室に寄進され後院領となった。

吾妻鏡の文治二年（一一八六年）十月二十七日の条に「伴野庄地頭加々美二郎長清云々

とあるから、佐久郡伴野庄の地頭職は平家討滅の戦功によって甲斐源氏の小笠原長清に与えられたことがわかる。長清は伴野庄の地頭職を子の六郎時長に与え、以後、小笠原六郎時長の子孫が伴野氏を称して、この地の豪族としてその勢いを振るうことになる。

しかし、この小笠原氏の土着する以前に次のことに注目して置きたい。栗岩英治氏の「信濃荘園の研究」によれば、平安時代の末ごろ院領であった信濃国佐久郡籠山荘に下司として下向してきた藤原氏の末流が、籠山館に住んで籠山氏を称したことが記されている。

籠山は小宮山である。周囲に山をめぐらした地形から籠山と名づけられたものであろう。

彼等は小宮山を発祥の地として小宮山氏を称したものと考えられる。（この藤原氏系の小宮山氏のほかに、後に入ってきた滋野氏系の小宮山氏もあると考えられるから注意を要する。）

小宮山にはまた、小笠原長清の父、信濃守加々美遠光がここに居住したという伝承がある。しかし、遠光も長清も彼等は源頼朝の信任の厚い鎌倉幕府の重臣であって、甲斐国中巨摩郡加賀美、小笠原の地を本拠とし、また鎌倉や京都にも居館を構えているので、恐らく彼等自身が伴野庄に居住したことはなく、家臣の目代を派遣していたものと考えられる。この目代の役所が小宮山に置かれ、その結果遠光居住の伝承も生まれたものと思われる。

これらのことを考え合せると、平安末期から鎌倉時代のはじめにかけての伴野庄の中心は小宮山に置かれていたとみてよいであろう。

いま野沢に伴野氏館址が史跡として残されているが、この野沢に新たに居館を築いて居住したのは、長清の子の六郎時長であると考えられる。鎌倉時代に入ると、千曲川からの水路の導入ができるようになり、野沢平全域にわたって水田化がすすみ、伴野小笠原氏も地頭の居館の濠には千曲川から導いた用水のの水を入れた。これらの用水は、今日の八ケ用水のもとをなすものであろう。居館の周囲には市庭をつくり、物資の集散が行なわれた。弘安二年（一二七九年）の冬、時宗の開祖一遍上人が伴野庄を訪れ、伴野の市庭や小田切の武士の屋形で、紫雲たなびく奇瑞に感じ、民衆と共に念仏し、提をたたいて踊った等のことが一遍上人絵巻（京都歓喜光寺蔵）一遍上人絵詞伝第二巻（金台寺蔵）に記されているが、これは時長の子、時直の代である。

長清の子、六郎時長即ち伴野氏初代は、吾妻鏡に二十数回にわたってその名が見え、将軍の随兵や幕府公式の際に於ける流鏑馬等の射手を勤めるなど典型的な鎌倉武士の一人であった。彼は恐らく伴野庄の野沢館に居住するよりも、鎌倉に居住することの方が多かっただろうと思われる。彼は悲運の将軍源頼家の側近であった長兄小笠原長経が、頼家の失脚に連座して北条氏に疎外される等のことがあったためか、伴野庄の地頭職と共に小笠原惣領職をもち、伴野小笠原氏の勢いは甚ださかんであったのであるが、時直の子、伴野長泰のとき弘安三年（一二八五年）十一月、鎌倉幕府の重臣、安達泰盛の乱（霜月騒動）に連座して、父子五人が謀せられ、伴野氏は壊滅的な打撃をうけて衰えてしまった。

事務局だより

第二回学習会開かれる

先に通知したとおり、第二回学習会が三月二十日、午前、後沢遺跡の現場で、午後、野沢会館にて約二十名の参加者をもって開催されました。

後沢遺跡での現地実習は、おりもおり東信で初めて発見された方形周溝墓の掘り下げ作業が開始された時であり、参加した人々にとってたいへん貴重な体験となりました。

午後は、場所を野沢会館に移動し、藤沢講師による縄文式土器の紋様についての学習を行ないました。

初めに、縄文原体の作り方、竹管文の種類等の理論的学習を行ない、予備知識をある程度得たところで、黒岩副会長の持参してきた原体の見本（たいへんよくできておりほとんどの原体がそろっていた）と寸山会員の貴重な資料を参考として、土器の文様が、どのような施文具を用い、どのような方法で施文されたのかを、油粘土を使用して実際に行ないながら学習しました。

油粘土の上に、なんのへんてつもない一本の縄をころがして、手にもった縄文土器とまったく同様な文様がうかびあがってきた時には、何ともいえない感動を覚えました。

後沢遺跡の現場から野沢会館へといそがしい日程でしたが、たいへんいろいろな知識を得て有意義な一日でした。

編集後記

通信No.7をお届け致します。

毎度の事ながら、今回も予定より遅れました事、深くお詫び致します。

いつのまにか、桜の花も散り、ここ佐久の地も緑の季節に入ったようです。

佐久考古通信も、すでに今回で7号、当面の目標である十号を目前に控え、十号には、特集号を組む事も考えております。通信が、会員諸氏のコミニケートの場として、増々活用して頂けるよう、編集子一同、頑張りたいと思っております。

（H・H）

好天気がつづいて後沢遺跡調査の現場では皆まっ黒に陽やけしています。

考古通信もいそがしい作業の合間をぬって出来上りました。今回は調査を中心とした論文でまとまったようです。

手持の原稿がありましたらどしどしお寄せ下さい。

（K・S）

佐久考古通信 No.7
発行所 佐久市大字岩村田3338〜1
佐久考古学会事務局 木内 捷
TEL (02676) 7 4443
発行者 由井茂也
編集者 林 幸彦・花岡 弘
島田恵子

佐久考古通信

No. 8
1977, 8, 25
佐久考古学会

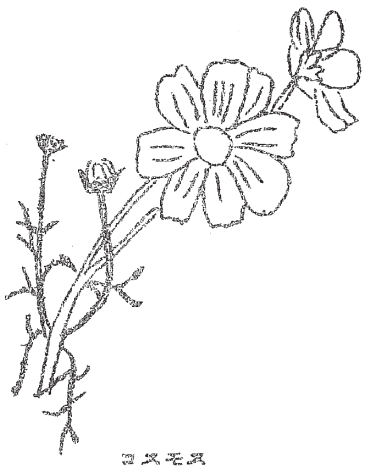
一　昭和五十二年度佐久考古学会総会について（予告）

二　昭和五十一年度佐久考古学会会務報告

三　昭和五十一年度会計決算報告

四　昭和五十二年度事業計画（案）

五　昭和五十二年度会計予算（案）



昭和５２年度佐久考古学会総会について（予告）

1，日　時　昭和５２年９月１０日（土）午後２時～

2，会　場　佐久市野沢会館洋間２号

3，日　程　ＰＭ２：００～

　　１）　開会のことば

　　２）　会長あいさつ

　　３）　日　程　説　明

　　４）　議　長　選　出

　　５）　議　　事

第１号議案　昭和５１年度会務，決算，会計監査報告及び承認の件

第２号議案　昭和５２年度事業計画（案）承認の件

第３号議案　会則変更の件（会費値上げ等）

第４号議案　慶弔基金積立の件

第５号議案　昭和５２年度会計予算（案）承認の件

第６号議案　昭和５２年度役員改選の件

　　その他

　　６）　閉会のことば

4，講　演　ＰＭ３：３０～

　　「長野県における古式土師器の成立」

　　講　師　花　岡　　弘

5，スライド大会　ＰＭ４：３０～

　　「後沢遺跡」　調査主任　林　　幸　彦

6，懇親会　ＰＭ５：００～

　　会費約１,５００円

（当日車は御遠慮下さい）

（第１号議案資料）

XXXXXX 昭和５１年度佐久考古学会会務報告 XXXXXXXXX

S51年6月13日	佐久市岩村田旧広域事務所にて総会及び県考古学会事務局長　森嶋　稔講師による記念講演「長野県における旧石器」を行なう。（33名）
S52年1月29日	佐久市岩村田浅間会館にて役員会を行なう。（10名）
S52年2月　1日	佐久考古通信No.5発刊
S52年2月20日	佐久市岩村田浅間会館にて、第1回学習会を、藤沢　平治、高村　博文の両氏の指導のもとに行なう。（15名）
S52年3月20日	佐久考古通信No.6発刊 佐久市小宮山後沢遺跡での現地学習会と野沢会館にて、藤沢　平治氏の指導のもとに「縄文式土器の文様を中心として」の学習会を行なう。（20名）
S52年5月25日	佐久考古通信No.7の発刊
S52年8月20日	佐久市岩村田浅間会館にて役員会を行なう。（10名） ・役員改選の件 ・昭和52年度総会の件
S52年8月22日	佐久市野沢会館にて役員会を行なう。
S52年8月25日	佐久考古通信No.8の発刊
S52年9月　1日	『佐久考古』No.3の発刊

以上、日付順でられつした事業を項目別に総合すると、

1. 総　会　　1回
2. 記念講演会　1回
3. 学習会　　2回
4. 通　信（No.5～8）4回
5. 会　報　No.3の発刊
6. 役員会　　3回

となり、当初の予定とは異ったが、かなりの事業を行なった。

昭和５１年度会計決算報告

収入の部

項目		本年度予算額	本年度決算額	比較	説明
1 繰入金	1) 繰入金	28.160	28.160	0	前年度より
2 会費	1) 会費	65.500	47.500	△18.000	
3 委託料	1) 委託料	0	0	0	
4 学会誌	1) 学会誌	35.000	1.200	△33.800	会報6冊売上
5 寄附金	1) 補助金	0	0	0	
	2) 寄附金	0	20.000	20.000	寄附金、広告料
6 雑入	1) 雑入	340	0	△ 340	
合計		129.000	96.860	△32.140	

支出の部

項目		本年度予算額	本年度決算額	比較	説明
1 報酬	1) 謝礼	15.000	5.000	10.000	講演会講師謝金
2 慶弔費	1) 慶弔費	10.000	0	10.000	
3 旅費	1) 一般旅費	0	0	0	
	2) 役員旅費	0	0	0	
4 需要費	1) 印刷費	40.000	46.900	△ 6.900	通信及び会報印刷代
	2) 消耗品費	20.000	1.700	18.300	封筒代等
	3) 食料費	10.000	6.380	3.620	会議賄費補助
5 役務費	1) 通信費	20.000	19.990	10	切手代
6 備品費	1) 備品購入費	0	0	0	
7 事務局費	1) 事務局費	10.000	0	10.000	
8 予備費	1) 予備費	4.000	3.500	500	県考古学会費等
9 繰越金	1) 繰越金	0	13.390	△13.390	次年度へ
合計		129.000	96.860	32.140	

（第２号議案資料）

昭和５２年度事業計画（案）

1. 総　　会　　９月１０日（土）
2. 例　　会　　月１回（第２土曜日ＰＭ２：００頃～
3. 講演会　　テーマ「佐久平の遺跡の分布について」
　　サブタイトルについては話し合の中で決定
3. 講演会　　９月１０日（土）
4. 見学旅行　　（年１回の予定）実費
5. 役員会　　随時（４回）
6. 会報の発行　　年１回
7. 通信の発行　　年４回

（第３号議案資料）

（会費値上げの件）

第５条　本会の運営の経費は次のように定める。

1. 会費　ア　個人会員　　年額1,０００円
　　イ　団体会員　　年額1,０００円
　　（ただし中、高校生については５００円）

――を「1. 会費　ア　個人会員　　年額1,５００円
　　イ　団体会員　　年額1,５００円
　　（ただし中、高校生については1,０００円）」
　　と改める。

（事務局幹事について）

第６条　第３項会長、副会長、事務局長、委員、会計監査の選出は ～～ とする。又事務局幹事は事務局長が選ぶものとする。 ――― を「～～とする。又事務局幹事は、役員会の承認を得て、事務局長が任命するものとする。」と改める。

（第５号議案資料）

昭和５２年度会計予算（案）

収　入　の　部　　単位　円

項　目		本年度予算額	前年度決算額	比　較	説　明
1繰入金	1）繰入金	3.390	28.160	△24.770	前年度より
2会　費	1）会　費	66.000	47.500	18.500	44人×1.500円
3委託料	1）委託料	0	0	0	
4会報売上金	1）会　報	10.000	1.200	8.800	200円×50冊
5寄附金	1）補助金	0	0	0	
	2）寄附金	0	20.000	△20.000	
6雑　入	1）雑　入	610	0	610	
合　計		80.000	96.860	△16.860	

支　出　の　部

項　目		本年度予算額	前年度決算額	比　較	説　明
1報　酬	1）謝　礼	5.000	5.000	0	講師謝金
2旅　費	1）一般旅費	0	0	0	
	2）役員旅費	0	0	0	
3需要費	1）印刷費	46.000	46.900	△ 900	通信４回考古１回印刷費
	2）消耗品費	5.000	1.700	3.300	文具他
	3）食料費	5.000	6.380	△1.380	会議時等
4役務費	1）通信費	15.000	19.990	△4.990	郵送代等
5備品費	1）備品購入費	0	0	0	
6事務局費	1）事務局費	4.000	0	4.000	車借上、行動費等
7予備費	1）予備費	0	3.500	△3.500	
8繰越金	1）繰越金	0	13.390	△13.390	
合　計		80.000	96.860	△16.860	

佐久考古通信 № 8

発行所　佐久市大字岩村田住吉町1040～7

佐久考古学会事務局　木内　捷

TEL　02676(8)0617

発行者　由井茂也

編集者　高村博文・林　幸彦

花岡　弘・島田恵子

佐久考古通信

No. 9
1978, 1, 31
佐久考古学会

一、あいさつにかえて
二、学会の動向
三、県考古学会「埋文白書」について
四、本会顧問。元副会長　与良清先生をいたむ
五、与良　清先生追悼号の原稿募集
六、「南。北佐久郡の考古学的調査」復刊のお知らせ
七、新役員の紹介
八、第二回例会の予告―赤い土器を追おう!!―
九、新入会員紹介
十、サボテンの花
十一、編集後記

あいさつにかえて

会長　由井茂也

例会に欠席された会員のみなさんには、改めてご挨拶致します。新年おめでとうございます。

ことしもまた早々から発掘や発見や破壊の報道がにぎやかにされています。研究者にとってはこれらのあとを追いかけるだけでも忙しいことです。また佐久地方だけでも発掘や研究調査が雪解けを待っていっぱいだと思います。どうか元気に頑張ってもらいたいと思います。

ところで大変なお願いをしたわけですが、県考古学会の埋蔵文化財白書の作成で、今度は具体的に取り組むことになり、佐久関係は佐久考古学会員全員の分担で作成することに決定しました。ほんとにお寒い時季、またお忙しい所大変なことではありますが、是非とも御協力願います。

今度の計画を協議していて、今史のように[illegible]地域の広大さにおどろいてしまいます。しかしこの調査の完遂によって、佐久考古学会が地域の全域にわたって活動できるのだと思うと、またとないすばらしい機会だと考えます。

尚、例会には必ず出席され不明の点など充分打合せ完成を期するように通信を借りて重ねておねがいし挨拶にかえます。

学会の動向

○　昭和五十二年九月十日

佐久市野沢、野沢会館にて総会が二十二名の参加者をもって開かれる。

会長挨拶のあと、第一号議案～第六号議案の議事に入り、充分討議を行ない、ほぼ原案どおり議決される。

林幸彦会員による「後沢遺跡」のスライドを見たあと、花岡弘講師による「長野県における古式土師器の成立」の講演が行なわれ、特に、東海地方及び南信地方の古式土師器のスライド等をおりまぜて説明していただき、日頃佐久地方の土器にしか接する機会を持たない会員にはたいへん勉強になったように思われる。

総会、スライド大会、講演会を終了後、近くの食堂にて懇親会を行ない、会員相互の旧交をあたためあった。

○　昭和五十二年十二月十日

佐久市岩村田にて、第一回役員会を十名の参加者をもって開かれる。九月十日に改正された会則第六条第三項により、事務局幹事を選出し、それぞれの役割り担当は事務局会で考えることを決める。又、第一回例会を一月十四日（土）に行なうことを決定する。

○昭和五十三年一月十四日

佐久市岩村田浅間会館にて第一回例会は、二十三名の参加者をもって開かれる。例会のテーマである「佐久平の遺跡分布について」の取り組み方について話し合いを行ない、最初弥生時代に時期をしぼって活動することを決め、サブタイトル名は、佐久平の後期弥生時代の特徴的土器である赤色塗さい土器をシンボル化し、「赤い土器を追おう／」と決定する。

又、県考古学会で実施している「埋文白書」の件を本例会で取り組むことを決　。

○　昭和五十三年一月二十日

佐久市岩村田にて第一回事務局会を、十二月十日の役員会で承認された幹事及び事務局長の六名が集まり、役割り分担及び例会の「赤い土器を追おう！」の取り組み方について話し合う。

県考古学会「埋文白書」について

第一回例会の冒頭に会長さんから提案され、この例会に取り入れ、会員全員の参加をもって白書を作成したい考えを述べられた。しかし様式、内容等について県考古学会との連絡がスムーズにとれていないため、その対策をどのようにしたらよいかと話し合っていたところ、ちょうどよいタイミングで、県考古学会事務局長である森嶋稔氏をはじめ川上元氏森山公氏の三氏が訪れ、遺跡分布図、記入用紙等を持参され、記入方法等について説明があり、どのように対処したらよいかがわかった。そこで会長からの提案について参加者全員で話し合いを行ない、この例会で取り組むことに全員一致の賛成を得た。尚、提出期限が二月下旬までとの切迫した期間のため、各地区の担当責任者を出席者中心として左記のように割当て実施することになった。

①　地区別担当責任者

○軽井沢町
○御代田町
○浅科村　　土屋　長久
○小諸市　土屋　長久・土屋　実
○佐久市　藤沢　平治・白倉盛男・木内捷
武藤　金・井上行雄・佐藤　敏
森泉定勝・青木幸男・高村博文
野沢南高校郷土史班
○臼田町　黒岩　忠雄・三石　延雄
新津　開三
○佐久町　島田　恵子・三石　延雄
井出　正義
○八千穂村
○小海町　井出　正義
○北相木村　由井　茂也・由井　明
○南相木村　吉沢　忠重・土屋　忠芳
○南牧村　菊池　民雄・林　幸彦
○川上村

②　中間報告

二月十八日（土）第二回例会にて行なう。

③　提出期限

二月末日

④　提出場所

佐久市岩村田住吉町一〇四〇の七
佐久考古学会事務局　木内　捷

※　尚会員のみなさんも各地区担当責任者と連絡をとって協力を願います。

本会顧問・元副会長

与良　清先生をいたむ

与良先生は、一月十五日午前四時四十八分心筋硬ソクのため、小諸病院で亡くなられた。七十歳。

旧制野沢中学校卒業後、教職にあるかたわら、研究及び調査活動をされ、現職、小諸市

文化財審議委員長・小諸市志編纂主任・東信史学会副会長・環浅間高山蝶保護対策協議会長等の要職にたずさわってきた。

先生は、温厚、学徳広く、その人格を以って、後輩、会員の指導、育成に努め、文化財保護の上でも大きかった。

「信濃史料」編纂に従事、さらには「北佐久郡志」四冊の刊行等の業績がある。県考古学会の創立にもつとめられた。

遺跡の調査では、戦後、ことに小諸市郷土遺跡の学術調査を実施し、敷石住居址の保存施設等、先生の文化財保護への指導は大きかった。

先生は、考古、史学ばかりでなく、広い分野より人間性の生活史の探求につとめられて、又、県文化財保護指導委員としても、パトロールを強調された。

特に昭和五十年度より、小諸市、軽井沢町、御代田町の文化財審議会合同による、浅間山高山三蝶保護対策を提唱し、さらに県境を越えて、群馬県側隣接町村と、高山植物やカモシカも対象にパトロールの実施及保護推進の[illegible]

先生は、これらの高山の動植物の保護を通じ、これを主体に佐久平全体の文化財審議会の合同協議会も構想化されていた。

今年度の学会の埋文白書にも地域協力が必要であり、今後私達会員及諸先生方で推進しなくてはならないと思われる。

近年の遺跡発掘調査は、

○ 佐久市前田原古墳群（昭四十七年）

○ 御代田下原古墳群（昭四十九年）

○ 小諸市御牧ヶ原下笹沢敷石住居址（昭五十年）

の調査団長をされ、ことに敷石住居址は、小諸市図書館内庭に移転、復元保存された。

主要編著書には「北佐久郡志」「小諸市誌」第一巻考古篇、「与良区誌」、「川辺村誌」「小諸の文化財」、その他論文多数。

つつしんで先生のごめい福をお祈り申し上げる。

土屋長久

与良清先生追悼号の原稿募集

この度御逝去されました、与良清先生を偲んで追悼号を発刊する事を計画しました。

先生との想い出や、先生を偲ぶ原稿をお寄せ下さい。

〆切　二月二十八日（必着）

送付先　岩村田住吉町一〇四〇の七　木内捷事務局長まで

「南・北佐久郡の考古学的調査」復刊のお知らせ

昭和九年に刊行された、八幡一郎著の、「南北佐久郡の考古学的調査」がこのたび復刊されました。

定価は、「南佐久郡の考古学的調査」が六五〇〇円。「北佐久郡の考古学的調査」が七八〇〇円です。佐久考古学会で一括して購

入しますと、割引されますので事務局で取り扱う事にしました。

申し込みは、（02676～8～0617）木内　捷事務局長までお願いします。

☆☆☆新役員の紹介☆☆☆

○会　長　由井　茂也　〒三八四～二二川上村御所平　電（〇二六七九）七～二四〇一

○副会長　黒岩　忠雄　〒三八四～〇三白出町諏訪　電（〇二六七八二）二四八七

藤沢　平治　〒三八四～〇一佐久市跡部　電（〇二六七六）二～六六七七

○地区委員

Ⅰ地区（軽井沢町・御代田町・小諸市）

土屋　実　〒三八四小諸市六供　電（〇二六七二）二～一〇三九

Ⅱ地区（北御牧村・立科町・浅科村）

福島　邦男　〒三八四～二二望月町片倉

Ⅲ地区（佐久市）

武藤　金　〒三八四～〇一佐久市平賀北耕地　電（〇二六七六）二～五一七八

森泉　定勝　〒三八五佐久市岩村田荒宿　電（〇二六七六）七～四七七七

佐藤　敏　〒三八五佐久市岩村田相生町　電（〇二六七六）七～二〇七五

Ⅳ地区（白出町・佐久町・小海町）

三石　延雄　〒三八四～〇六白出町入沢　電（〇二六七八二）四一〇一

Ⅴ地区（北相木村・南相木村・南牧村・川上村）

土屋　忠芳　〒三八四～一三南牧村野辺山　電（〇二六七九）三三九二

由井　明　〒三八四～一四川上村御所平　電（〇二六七九）七～二〇四六

Ⅵ地区（その他）

臼田　武正　〒三九九～八六北安曇郡池田町二五四〇

前原　豊　〒三七一～〇二群馬県勢多郡宮城村馬場四六の二

○事務局

局　長　木内　捷　〒三八五佐久市岩村田住吉町一〇四〇の七　電（〇二六七六）八～〇六一七

（幹　事）

会計　高村　博文　〒三八五佐久市岩村田一九五〇浅間荘内　電（〇二六七六）七～一五六二

会　報　井出　正義　〒三八四～一二小海町東馬流　電（〇二六七九）二～三一七一

会　報　土屋　長久　〒三八四～〇五軽井沢町長倉三〇三三　電（〇二六七四）五～五〇二九

会　報　青木　幸男　〒三八九軽井沢町星野　星野温泉ホテル　電（〇二六七四）五～五一二一

通　信　林　幸彦　〒三八五佐久市岩村田一九五〇浅間荘内　電（〇二六七六）七～一五六二

通　信　花岡　弘　〒三八四小諸市六供　電（〇二六七二）二～一二八六

通　信　島田　恵子　〒三八四～〇六佐久町羽黒下　電（〇二六七八六）三一四三

庶　務　高村　博文・青木　幸男

林　幸彦・花岡　弘

****

第二回例会の予告

―赤い土器を追おう！―

****

日時　二月十八日（土）PM2:00～

場所　浅間会館

内容　①「埋文白書」の中間報告

②「赤い土器を追おう！」の具体的検討

③その他

新入会員紹介

○荻原　淳一　〒三七二　市川市国分五丁目十六～二六石橋荘内

（学生会員）

○浅川　宗生　〒三八五　佐久市上平尾一七二四

&&&&&&&&&&&&&&&&&&

サボテンの花

竹内　きみ子

梅雨の合い間の　青い空

いつにもまして　青く澄み切って見えるのは

どうしてかしら？

久し振りの太陽の下の息を吸い込んだら

お陽様のニオイがしました

何気なく　横を向いた私の目に　飛び込んだのはオレンジの花

（咲いたのね　サボテンの花が……）

砂漠の　熱砂に咲くサボテンの花は　隊商の人々の心を慰めるという

ギラギラした太陽の下の人々は　もの言わぬ花から　何を感じるのでしょう？

果てしなく続く　砂漠の向こうの　オアシスでしょうか？

きっと　そんなことを考えている間に　目的地への一歩を　踏み出していますね

サボテンの花……

自分を見つめる　幻に似て……

~~~~~~~~~~~~~~~~

編集後記

佐久考古通信No.9号をお届けいたします。No.8号から六ケ月ぶりという発行です。総会後やっと通信の係が決定したという事情もあって、いつもの遅刊をお詫びいたします。

昨年に引き続き、林、花岡、島田の三名が担当致しますので、よろしくお願い申し上げます。

今年は、埋文白書の作成、学習会と活発な動きを始めました。通信へも原稿をどしどしお寄せ下さい！

佐久考古通信 No.9

発行所：佐久市大字岩村田1040の7

佐久考古学会事務局　木内　捷

TEL(02676)8-0617

発行者：由井　茂也

編集者：林　幸彦　花岡　弘

島田恵子
~~~~~~~~~~~~~~~~

佐久考古通信

No. １０
1978, 3, 31
佐久考古学会

一　長野県考古学会総役員会報告
二　パトロール日誌（一）
三　上桜井北遺跡発掘に参加して
四　佐久平の土師器　――その概観――
五　編集後記

ゆきわりそう

長野県考古学会
総役員会報告

昭和五三年二月十九日、委員・幹事・埋特委・阿久遺跡保存対策委・事務局の県学会総役員会が諏訪市に於て開催され下記事項が話し合われました。佐久地区の出席者は、由井、井出、渡辺、黒岩の四名。

1. 阿久遺跡保存運動の経過報告
　○五二年度に於ける運動は信濃考古№44号参照、阿久通信第1号2月8日完成。
　○署名・カンパについて（S53年2月19日現在）
　署名　二六、四〇〇人
　カンパ　金二八五、〇〇〇——
　御協力に感謝します。
　現在金一二〇、〇〇〇——赤字未カンパの会員のご協力をお願い。
　○抗議行動について
　二月十四日、県教委に抗議文を手渡す。
　二月十七日、道路公団に対し、二六、四〇〇人の署名と抗議文を手渡す。
　二月十七日、文化庁に、二六、四〇〇人の署名と抗議文を手渡す。

2. 県教員の見解に対する質疑、討論。
　（省略、信濃考古№45に掲載予定）

3. 阿久遺跡保存に対する学会の意見統一と今後の保存方向。
　○国の指定遺跡とする全面保存。
　○署名、カンパを続行する。

4. 諸協議
　①埋文白書作成について
　A4・一〇〇P・一五〇〇部・五月の総会までに発行。
　②埋文パトロールについて
　県文化課との契約が二月末日、協力を願う。
　③「中部高地の考古学」について
　現在編集中、四月二十日に発刊予定。
　④第3回藤森栄一賞選考について
　選考カード選考中。
　⑤会計について
　会費未納者が多い。困る。
　⑥事務局移転について
　事務局移転対策委員を特設し推進することに決定。

尚以記載事項は信濃考古№にて詳細は報告することになっております。以上　黒岩

パトロール日誌(1)

土屋長久

1

文化財パトロールは、第一回の昭和四五年度から、主に佐久平を対象に、県教委の分布調査等で、その後、文化財保護上、高山蝶・動植物のパトロール、石造物、又、今は、指定文化財（建物）の防火防犯パトロールまで及んで、実際は、他の自然保護条例、消防行政、開発等の関連法規の研修、周知である。

当初の埋文から、美術工芸品の調査にまで及び、今は中山道歴史の道調査と、地教委という、地域全体の文化財保護は、住民の理解と協力なしではとうていできない。諸々、その人の立場や、不幸にして諸事情で、協力性はさておき、よく、行政批判を行う人を、新聞誌上で散見する。開発と保護という復雑、且つ、その遺跡地点で、すでに歴史が移っている時代の急変の処置に、いかにして対拠するかという、テクニックである。

むかし、朝廷の条里制の施行等の土木工事

ですら、当時の墓（古墳）を移転したり、破壊した史実。又他の氏族の古墳地の上に、巨大な石で構築したあの石舞台、行政という力の強さを知る。

2

遺跡調査も、その方法や扱い方が、年々、新しい方法で報告され細分されてゆくが、開発に伴う調査は、緊急の記録保存という前提に立っての行政調査であり、そこに、学術的に調査（費用と日数）を計画しても、他方にあっては、きわめて厳しい壁がある。ある意味では行政の流れに任し、研究面への追求が我々の最終的な任務であるまいか。それは仕事が一段階を経た後でも充分可能である。

二月六日、某新聞社から通報があり、同時に、軽井沢町教委文化担当から、開発地域の調査を依頼された。軽井沢町発地地籍である。付近の遺跡群には昭和四二年度、関孝一先生と踏査、自然丘の様なものに古墳があるかという事で、以後入山峠調査の国学院大学の周辺調査等もあった。

発地（ほっち）地方は、湿地性の高原地帯でもあり、かって発地千軒と称した、七寺八堂の伝承もあり、河川の氾濫で流失したという。

さて問題の丘であるが、地主の話によれば、ごく最近までの馬捨場といわれ、約三分の一消平されていた。土に交って、新しい馬骨片数ケが出土していた。

付近は、女街道の通過地点であり、馬頭観音からの石造文化財群が多い。この径約五十m、高さ約五mの自然丘を利用し、石造物が多くあれば、民俗学上の調査対象にもなり得る。

県では石造文化財は、民俗学の中に入っている。民俗学方面へ方法として発掘が加われば、民俗考古学である。やがていくばくもない、年代には具体化もあろう。

埋文パトロールを通じ、文化財保護全般へのパトロールが必要であろう。ごく最近できた、〃ひかりごけ〃もある意味で、大きな保護活動をなしているといっても可言ではない。

かくして、軽井沢町教委と地主、業者間の現場視察、協議はすみ、遺構の判断は、作業している一般の人でも判り、遺物がザクザク検出した折には、町教委の行政指導にそうということになった。

某新聞記者に、古墳とか、信仰塚の可能性はうすい旨伝えたが、何を思ったか、次の日の真楽寺の報道であった。

一月二十六日の防火デーの視察パトロールの結果、具体化した件を、すでに真楽寺へ報告やら、依頼した直後であり、防ぐよしもなし。ともあれ、近世寺領数万石の大名格の寺院で、我々でも、山門からはめったに入れない。諏訪湖と立科山、小沼池とを結ぶ、ダイナミックな甲賀三郎伝説もあり、きわめて、重要な文化財であることは周知の通りである。

3

昭和四八年、県文化財係長の金井先生が視察し、三重の塔は数少く、すべてを県指定として、その候補文化財となっている由、をお聞して安心したが、その後の具体化は、小田井宿跡と同様、地教委まかせの現状である。一番困ったのは、新聞記事内容に正確性がとぼしく、専門用語（消防行政）の扱いが慎重性に欠けていたことであった。

我々が協力することは、取材にあたっては始めに、原稿を用意する諏訪方式が一番良い。マスコミには気をつけよう。（五三、二、十）

上桜井北遺跡
発掘に参加して

荻原淳一

大学に入り、考古学同好会に入った。それまでの僕は、考古学、特に発掘ということには興味はあったが、そういった方面のことは、ぜんぜんしたことがなかった。

幸にも、夏休みに是非やってみたかった発掘に参加できたのであった。発掘に関しては何一つ知らなかったので、一つ一つ覚えていった。たまたまに、すばらしい遺物が自分の掘っている所から出たときは感激であり、それが何器であるかを聞いた。

初めて住居址を掘り下げた時は、どんなすばらしい遺物が出、又、どのようになっているか期待していた。しかし、H1住居址からは期待していたほどの遺物は出なかった。

反省として、発掘の前にある程度の知識をもってからやった方が、より勉強になったのではないかと感じた。

佐久平の土師器
――その概観――

花岡弘

昭和四十年を前後して、県内の発掘調査件数は急激な増加を示した。佐久平も例外でない。その大半は、緊急調査と呼ばれる憂うべきものではあるが、その反面、膨大な資料を提供してきているわけである。本稿は、佐久市を中心とした佐久平の土師器について一瞥したいと思う。

ここでは、まず、簡単な学史についてふれておきたい。

長野県における土師器の研究は、昭和二九年の平出遺跡の調査に開始されたと言える。

その後、県下においては、桐原　健・岩崎卓也・笹沢　浩・宮沢恒之の諸氏により、地域的な編年が提出されている。土師器研究の最近の動向としては、まず技術論が活発化していること、又、いわゆる小地域においての編年がなされていることが掲げられよう。

現在、佐久平の土師器の編年は、古い順から、五領式土器（いずみ）―和泉式土器（おにたか）―想崗（Ⅰ・Ⅱ）式土器―真間式土器（まま）―国分式土器（こくぶ）という名称を一般に使用しているわけである。言うまでもなく、これらの土器型式は、研究の先進地という理由から、南関東の編年をそのまま借用しているわけであり、大まかな点においては共通点は認められるものの、細部を検討した場合、国分式土器においても地域差を認めなければならないであろう。

では、大まかに土器型式と時代区分との対比、更に、佐久平における主な遺跡について述べてみたい。

まず、古墳時代前期の土器型式として五領式土器がある。この時期は、県下においても古墳の築造が開始された時期でもある（例えば、松本市弘法山古墳）。佐久平における該期遺跡は、未だ明確ではないが、佐久市岩村田餅出、同・西一里塚、同・野沢市道の諸遺跡から、東海地方西部にアイデンティティーをもつS字口縁台付甕形土器b類（註1）が出土しており、弥生時代後期末から該期に至る資料も漸次蓄積されつつある。

五領式土器後半の資料は、佐久市今井西原遺跡第一号住居址出土土器群がある。前半

期におけるS字口縁台付甕形土器は、姿を消すが、三孔の小型器台は残存している。又、五領式土器の甑形土器（有孔鉢）は、県下でも、茅野市下蟹河原遺跡の一例であり、煮沸具としては台付甕形土器が主として機能していたものと考えられる。

佐久平における五領式土器の開始は、4世紀中葉以降ではないかと考えている（註2）。

続く和泉式土器を出土する遺跡は、徐々に増加しつつある。代表的な資料は、佐久市市道遺跡第2号住居址、第3号竪穴状遺構出土例がある。これまでの知見では、特に高杯形土器の数が多いこと、甑形土器（単孔鉢）の存在が看取される。又、この時期或いは続く鬼高Ⅰ式の時期において、不確実ではあるが移入須恵器が少数伴出する可能性がある。前記の資料は、和泉式土器の範疇でも後半のものと考えている。

古墳時代後期の土器は、鬼高式土器によって代表される。鬼高式土器は、一般に前半（Ⅰ式）、後半（Ⅱ式）と区分されている（註3）。まず、Ⅰ式は、市道遺跡第8号住居址出土資料が、比較的良好なセットとして認められる。又、昨年調査された佐久市後沢遺跡において古墳時代の住居址の大半がこの時期にあたっており、細分化、セットの把握等、検討することが可能となった。Ⅰ式には、黒色磨研の杯形土器も少数ながら存在する。

鬼高Ⅱ式土器を出土した遺跡は、佐久平においては、圧倒的に多い。杯形土器は、黒色磨研を施されたものが大半を占め、長胴の甕形土器も普偏化する。又、坩形土器も、長頸化するものの、一部には残存する。住居址出土の滑石製品（主に、臼玉）も、この時期まで確実に認められる。現時点では、Ⅰ式の時期をステップとしてこの時期に遺跡数の急激な増加を認めなければならないであろう。

続く真間式土器は、当地においても、最も不明確で、特に、この時期に関しては、今後の資料の増加を待つべきと考えている。

最後に、国分式土器は、前述した鬼高Ⅱ式土器に劣らず、資料数が多い。最近、中・南信を中心とした地域において、その細分論が提出されており（註4）、佐久平においてもその可能性は多分にある。又、住居址出土の墨書土器も多く、例えば、佐久市戸坂遺跡K1号住居址からは7個体が出土しており、県下でも、一住居址出土点数としては、上位に位置する（註5）。

国分式土器には、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器が伴出しており、細分には、この方面からのアプローチも可能と思われる。

この時期の住居址は、一般に集落址を構成するが、川上村横尾遺跡のように孤立した住居址として検出されるものがあることは、今後検討されねばならないであろう。

土師器は、その後も、瓦器、或いは土師質土器として残存するわけである。

以上、佐久平の土師器について、略述してきた。紙数にも限りがあり、個々の土器、或いは具体的な点については、概報、報告書等により御検討頂ければ、幸甚である。

なお、高村博文・林幸彦の両氏には、種々の御助言を賜わった。末文ながら謝意を表したい。

註1　大参儀一「S字状口縁土器考」いちのみや考古№13　昭和42年

大参儀一「弥生式土器から土師器へ 東海地方西部の場合」 名古屋大学文学部研究論集（史学） XLVII 昭和43年

2 なお、佐久平における該当資料は、久考古№3の付図を参照願いたい。石野博信・関川尚功『縄文』 昭和51年

従って、佐久平においても弥生時代後期の土器の一部が、4世紀まで下降することは、充分考えられる。

3 杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成 本編3』 昭和48年

この他、三型式に区分する考えもある。

服部敏史他『八王子中田遺跡（資料篇Ⅳ』 昭和43年

4 岡田正彦「平安時代土師器等の編年試論――特に長野県中南信地方の住居址出土土器を中心として――」 信濃第 巻第9号 昭和52年

5 岡田正彦「墨書・刻書土器小考――」 信濃第25巻第4号 昭和48年

付表

暦年代AD	土器型式	時代区分
300年代	五領式土器	古墳時代前期
400年代	和泉式土器	古墳時代中期
500年代	鬼高Ⅰ式土器	古墳時代後期
600年代	鬼高Ⅱ式土器	
700年代	真間式土器	奈良時代
800年代以降	国分式土器	平安時代

（市川市史より 加筆修正
尚年代は幅を有しており絶対的なものではない）

編集後記

佐久考古通信№10号をお届け致します。春の訪れと共に、第四回の例会は館遺跡を歩き回りましたが、〃疲れた〃の連発が起り以外に思いました。さあ！屋外に出て体をきたえましょう。

冬の間、家に閉じこもって各人それぞれが研究をしていた事と推察しています。№11号へその成果をお寄せ下さい。

佐久考古通信№10

発行所：佐久市大字岩村田1040の7
佐久考古学会事務局 木内 捷
TEL（02676）8－0617

発行者：由井茂也

編集者：林幸彦 花岡弘
島田恵子